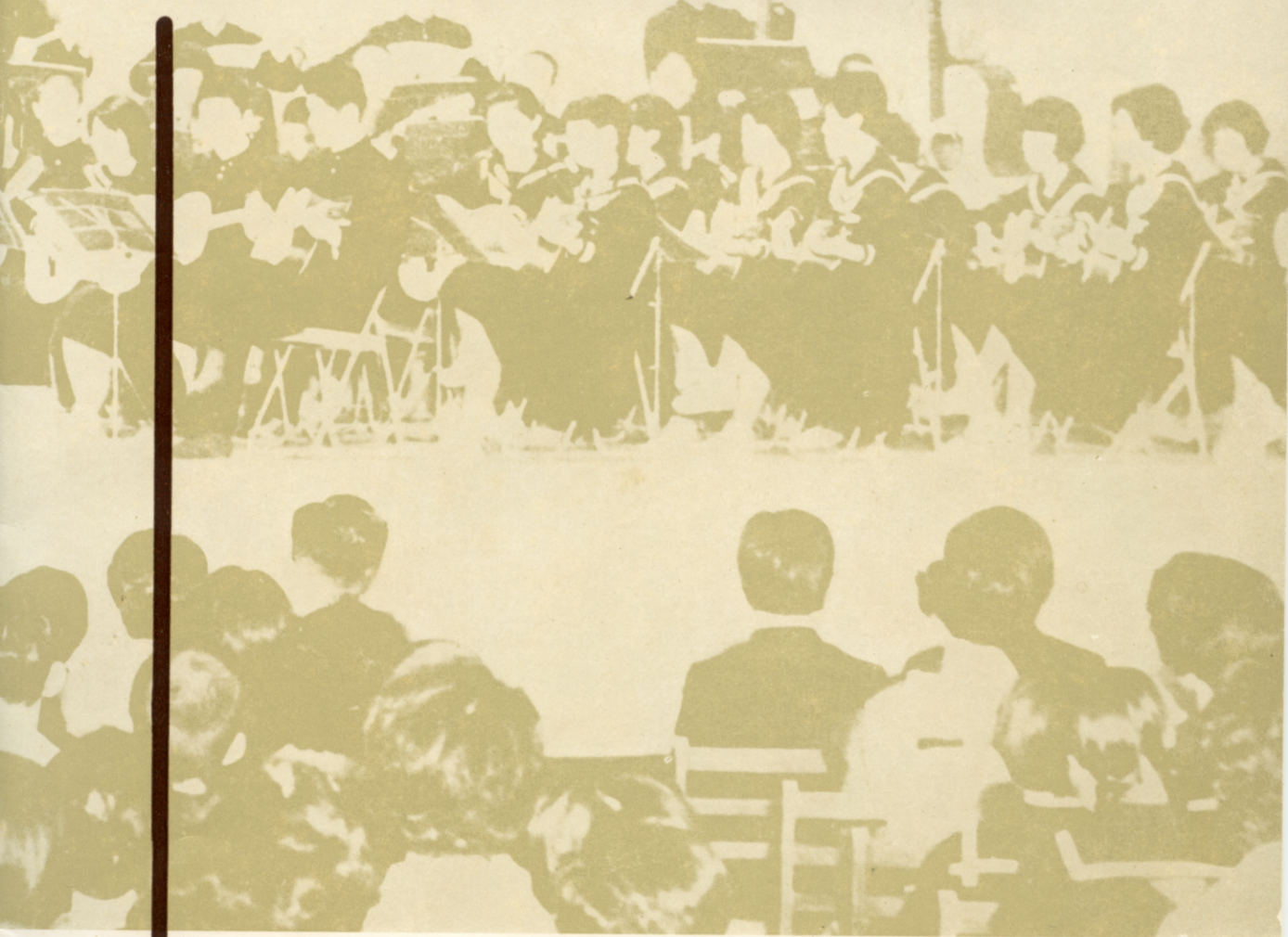




# PLECTRUM ENSEMBLE



岩高プレクトラム・アンサンブルの歩み

● 第15回定期演奏会記念誌 ●



上 第1回同窓生在校生交歓演奏会

第1回同窓生在校生交歓演奏会の折の記念写真  
(昭和37年8月) 暑さを忘れて楽しんだ一時

表紙 第15回秋季演奏会

“マンドリンの群” に意欲的演奏をしているところ  
(昭和37年10月)



# PLECTRUM ENSEMB

## 目 次

第15回定期演奏会記念誌によせて	吉村宮男	1
プレクトラムの思い出	山本重治	3
岩高プレクトラム・アンサンブルの歩み	熊谷幹雄	4
思い出	広兼弘毅	14
叱られて	守田史郎	14
生徒とサラリーマン	三浦孔司	15
マンドリン弁論	稲田勝彦	17
第15回定演によせて	長島 啓	19
訪問記(池ヶ谷先生を訪れて)	中村和夫	19
クラブ活動の思い出	藤中英機	21
岩高プレクトラム・アンサンブルについて	三浦秀子	23
猫とマンドリン	田村 忠	24
ドラ息子行状記	清水義章	25
御報告	中村雅子	26
ドラ息子の思い出	江見耕一郎	27
比留間先生訪問記(ヨーロッパ旅行を中心として)	清水義章	28
不協和音	中尾靖夫	31
マンドリンクラブの皆様へ	広兼和子	34
プレクトラムに思う	兼 敦子	35
マンドリンを手に	土井哲子	35
北上川夜曲	小東孝幸	35
思い出	弘兼嘉代子	37
岩国地区の活躍について	岩国幹事	38
プレアンで感じたこと	越智洋子	39
現役より		39
岩高新聞より		41
編集後記		42

## 第15回定期演奏会記念誌によせて

校長 吉村 宮 男

本校のプレクトラム・アンサンブルが、この秋15回の演奏会を迎えるに当たり、かねてクラブの先輩諸氏の間で、それを記念して、会誌を出される計画のあることを聞き、大変結構なことと思っていました。

ところが幹事の方より、私にも何か書くようにと懇懇されましたので、クラブの現況報告に併せて、思いつくままを一筆走らせ、その責を果たしたいと思います。

もう30余年も昔のことですが、私どもの学生時代にも、マンドリンを愛好するものもかなりいましたが、それも大抵は、個人で慰む程度で、合奏といってもせいぜい四重奏位のもので、現在本校のプレクトラム・アンサンブルのような大合奏は、東京や関西方面の大学のマンドリンオーケストラ以外には、地方の高等学校(旧制)や中学校では、あまり見られなかったように憶えています。

最近県内の高校でマンドリンクラブを作った学校もあると聞いていますが、マンドリンオーケストラとしての形態を一応整えているのは、本校のプレクトラム・アンサンブルだけでありまして、その点ユニークな存在だということができます。しかしそれだけに、他と比較する機会がありませんので、どの程度の実力なのか判定の下しようがありません。

その道の人に聞いて戴けば判明することなのでしょうが、地方にあってはそうした機会の得られないことが残念です。

例年6月開催される県下の高校連合音楽会に参加して、他の合奏団(その多くはプラスバンド)の中にたち混って、意欲的演奏を今も続けています。これについては先輩諸氏にもそれぞれ懐かしい思い出をお持ちのことと思っています。

私自身も去る昭和29年に、今はなき柳井高校東校舎講堂で初めてその演奏を聞き、若きよき日

の思い出にひたることができました。ことに他の団体にその比を見ない熊谷先生の軽妙にして熱意溢れる指揮ぶりに感激したものでした。

さて部員は年々増加の一途を辿り、文化系クラブの中でも合唱部についでの大所帯、35年春拡張しました横山講堂のステージに上がりきれぬ盛況です。従って新学期の新部員養成の折は勿論部室には入れませんので、階段から階段まで廊下いっぱいになっています。

一学期はじめのクラブ総会の折には、総員100余名の登録にうれしい悲鳴を上げていましたが、今では自然と淘汰され、80名となりました。

今はこのメンバーで秋の15回演奏会を目標に、夏休みも前期後期それぞれ10日間の練習日を設け、炎天下の部室で練習に励んでいます。当地在住の先輩の方々はことある毎に、また休暇中には大学在学中のクラブの先輩の方も練習に参加して、激励してくださっていますが、本当に有難いことだと思っています。

こうして作られた縦のつながりは、春ごとに開かれるプレクトラム・ソサエティの同窓会にと成長し、夏毎に催されるプレクトラム・ソサエティの演奏会となって結実するのだと思います。

美しいことです。

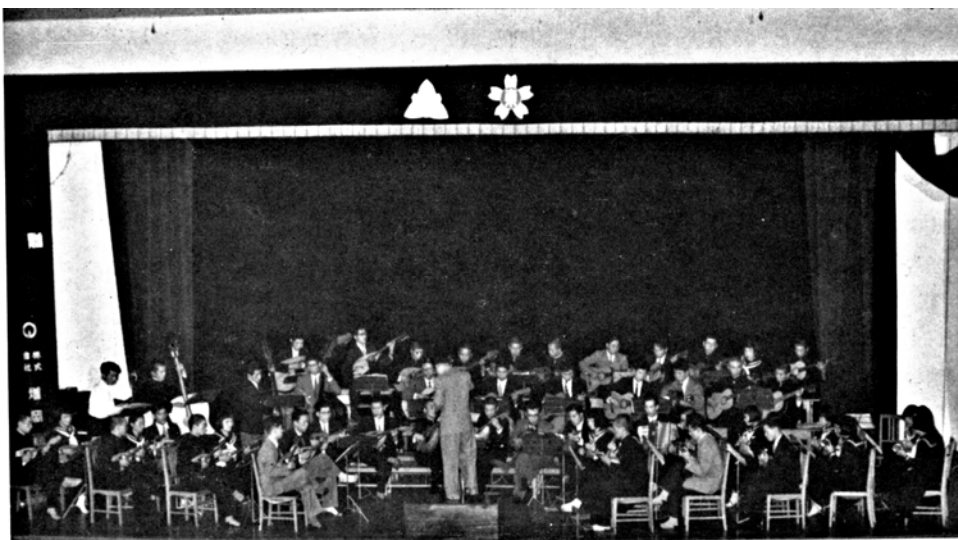
秋の演奏会を34年以來1ヶ月繰り上げて「10月初旬の日曜日」に開催していますが、これも3年生の部員中大学受験を目指す者に少しでも余裕を残そうとの考えからなのです。

高校時代は勿論勉強第一主義ですが、同時にクラブ活動を通じて人間性の陶冶の一助ともなり、又学生時代の懐かしい思い出の1ページを飾ることができるなら、これに越したことはありません。

そうした意味からも今後プレクトラム・アンサンブルが、高校生らしく、素直に、成長し発展して行くことに期待しているものです。

終わりに本年度全般に亘ったクラブの足跡を拾ってペンを置くことにいたします。

- 4月 新入生歓迎演奏会（本校）
- 6月 合唱部春季音楽会に出演（本校）
- 6月 山口県高校連合音楽会（小野田高校）
- 7月 県下鉦区校長会議レクリエーション（本校）
- 7月 全国高校ボクシング大会前夜祭（市労働会館）
- 8月 宇佐中学校訪問演奏（宇佐中）
- 8月 家庭クラブ指導者講習会レクリエーション（本校）



岩陽フィルハーモニック・マンドリン・オーケストラ  
第2回演奏会 風景（昭和31年秋）

#### ハーモニカ・アンサンブル

ハーモニカ合奏にマンドリン、ギターを加えて  
やがてマンドリン合奏へと移行する前提となった  
頃のもの（昭和23年秋）



## プレクトラムの思い出

前校長 山本重治

岩高に赴任して間もなく、文化部の中に聞きなれない名前 プレクトラムというクラブのあることが分かった。そして、それが所謂マンドリンクラブであるらしいということも知ったが、その由来がわからない。

早速、担当の熊谷先生にお尋ねしてみると、マンドリンの弦をかきならず「つめ」のことで、それもラテン語？であることを聞かされ、大変ゆかしいクラブの名称だと思った。

それから東京の学生時代の話が始まり、熊谷先生は、早大の学生時代から、ずっとこのみちで勉強し活躍してこられたとのこと。それに対して、私は音楽を聞くのは好きであるが、演奏はまったく不得手で、マンドリンを買った経験はあるが、すぐにあきらめて、時に奇声を発する程度、ただマンドリン同好会の友人がいたので、月1回の演奏会には、欠かさず聞きにでかけたものだと、プレクトラムの名称から発展して、昔の学生時代を懐かしんだものである。

それがきっかけになったのか、毎年クリスマスの前夜祭でのプレクトラムの集いには、いつも（といっても在職が短かったので、僅か二度ほどであるが）お招きをいただいた思い出をいつも胸に温めている。

“ 聖なる夜 ” “ ジングルベル ” …… 等等、クリスマスにふさわしい美しいプレクトラムのアンサンブル、それにあわせて自然に起こる合唱、指名されて困惑しながら歌い演ずる一人一人の懐かしい顔、私も指名を受けて例の奇声を発し、プッシーニのお蝶夫人や、北原白秋のかやの実などを歌った記憶、最後に緊張しながら見守るくじ引き …… そのときいただいた人形や小さい竹の帆かけ船は、今でも私の人形ケースのなかに収まっている …… 等等など思い出は

尽きない。

昨年暮、下関西高在任中、熊谷先生から、突然小さい小包の贈り物をいただいた。なんだろうかとあけてみると、その年のクリスマスに備えた練習会で、昔の集いをしのぶために編集されたテープレコードである。早速、携帯用のレコーダーを借りて家に持ち帰り、子供達と岩国を懐かしみ、プレクトラムの皆さんの昔を思う暖かいお気持ちを、しみじみ味わいながら、心から感謝したことである。

熊谷先生のお話で、岩高に入学して初めて楽器を手にしたものが、いつのかにか自由にひきこなし、立派なアンサンブルに成長し、やがて大学へ職場へ家庭へと分かれてゆくものが多いと承ったのであるが、それに付けても、岩高3ヵ年間に、このクラブで培われた自身と友情と師弟のつながりが、人生にかけがえのない美しいものに実るであろうことを、心の中で思ったことである。

今回、プレクトラムの定期演奏会15回目を迎えるにあたり、同窓会で記念号の発行が計画されているそうで、大変よい思いつきと思う。これからの社会は、特に人間関係を大切にすることが肝要です。岩高プレクトラムで培われた友情と協力の精神を実社会に活かし、楽しい思い出を胸に秘め、お互いに手をつなぎ助け合って、強く明るく朗らかに生きてゆかれることを、心から願いたします。

終わりに、皆さんの健康と前途のご多幸をお祈り申し上げて、ご挨拶に変える次第です。

（現、山口高等学校長）

# 岩高プレクトラム・アンサンブルの歩み

指揮者 熊谷 幹雄

## まえがき

岩高プレクトラム・アンサンブルの定期演奏会もこの10月の秋季演奏会で、15回目を迎えることになりました。

かねてこの機会に、記念行事の一つとして会報でも出そうという話が同窓生の方々の間から起こり、昨春プレクトラム・ソサエティ(プレクトラム・アンサンブルの同窓生の集い)の総会の席でいよいよ決定、私にも岩高プレクトラム・アンサンブルの歴史とでも言ったようなものを書くようにと、三浦孔司君から依頼されました。

本校に奉職して以来、私の職員生活の3分の1はプレクトラム・アンサンブルの育成に費やして来たのですし、その発生から今日にいたるまでを、一番よく知っているのも私なのでから「ああ、書きましょう」と、簡単に引き受けはしましたものの、さて、ペンを執ろうとすると、あんなこともあった、こんなこともあったと、とりとめもなく思い出が次々と浮かんで、何からどうまとめればよいのかつかみ所もなく、結局原稿用紙に一字を記すでもなく、ただ一人回想にのみふけて、いたずらに時を過ごしてしまいました。

無駄口なら気軽にたたき私も、さて活字となって後々までも残る原稿だと思えば、とたんに緊張して、手が重くなります。

それに、昨秋少々思い病気をしてから、もの忘れ臥激しくなって、かつて記憶していた筈の月日なども、霞のかなたに朦朧として、じれったいといったらありません。それに根が続かなくて・・・やっぱり年だなあって、誰です陰口を叩くのは・・・弁解がましいことを言って

すみませんが、こんなわけで約束の原稿が大変遅れてしまいました。

書こうという意味はあるのですが、書くという行動が伴わないのです。

三浦君からの再三再四最後の督促に締め切りも迫った今、やっとペンを執りました。(これも中学時代からの、宿題は締め切りすれすれにやっつけ仕事で片付ける悪習慣の名残が、未だに抜けきらないのかも知れません。)

ともかくも書かなくてはならぬと決心して、さて書き出せば、とかく私中心の話になりがちなので、聞きづらい否読み読みづらい点もあるかと思いますが、これも年の所為とお許しください。

## 1. 岩中ハーモニカ・アンサンブル

さて、岩高プレクトラム・アンサンブルのことをお話するには順として、その前身に当たる岩中ハーモニカ・アンサンブルのことからお話しなくてはなりません。

では、しばらく昔話を聞いてください。

私が職員生活を始めて9年目、懐かしい母校に帰ってきたのは、終戦の翌春、昭和21年4月6日付けでした。(もちろん未だ県立岩国中学校といった時代です。)

戦争の終わったという安心感も、やっと生き抜いたという喜びも、占領下という不安の前におののいていた時のことです。

食糧事情は最悪で、栄養の乏しい黒ずんだ顔の少年達を前に、教壇に立った時のわびしさ、・・・殊に寄宿舎の舎監を命ぜられ舎生と生活を共にするようになって、日々の食生活の

惨めさ、今思い起こしても身震いを感じます。

服装にしても、巻脚絆こそ付けてはいませんが、戦争中と同じ戦闘帽に、つぎはぎだらけのカーキ色の国民服、まともな靴もなく、草履を突っかけたり、下駄履きであったり、地下足袋でもあれば最上のほう、教室はいうまでもなく、舎室にしてもガラスは割れたままに板をあてがいやっと風を防ぐといった風情、どこを見ても心の潤いとなるようなものとてありませんでした。

壕畔の老松も次々と枯れ、公園の桜さえも申し訳程度に春を告げただけ。やっと生き生きとしているものといえば城山の初夏の緑と校庭の老楠の若葉ばかり、“国破れて山河あり”と古人の詩にはありますが、その山河さえも荒れ果てていたのです。

こんな折、しばしの間でも舎生に心の楽しさを与えることはできまいかと、今は故人となられた樋口渡先生(本校の校章を図案なされた方)と計画したのが舎内演芸会。

数日前から舎生も皆張り切って、室毎にそれぞれ出し物を工夫したり、練習したり、急に元気づいてくれました。

いよいよ当日は自習室(今の横山校舎被服教室)に各自の座り机を土台に上に畳を敷いてステージを作り、バックには緑の幕(ふるい部員の方々には思いであるもの)を使い、ありあわせの引き幕も用意し、どこから探し出したか、古いモールや、万国旗で飾り立て、出来上がったのは田舎芝居の舞台めいたものですが、あの土気色をしていた舎生たちの頬に、久々に少年らしい生気を漂わせて、嬉々として準備にいそむ様子に、樋口先生とこれだけでもよかったと話し合ったものでした。

その晩の楽しかったことはここに関係がありませんから省略しますが、こうしてペンを走らせながら私の瞼の裏にはその場の情景がつい先夜の出来事のようにくっきりと浮かんできます。

その折ハーモニカの吹ける辛島君兄弟や片山

孝雄君、佐伯史郎君(現守田君)など数名の者で校歌や明強寮歌その他を簡単にアレンジして合奏したのがきっかけとなって、校内に音楽部を作ろうと、早速職員室前の廊下に張ったポスターが、今も部室の壁に貼ってある樋口先生の書かれたあの部員募集のポスターです。

その折集まった生徒達にはヴァイオリンを弾くものあり、ハーモニカを吹くものあり、種々様々、その年の夏休み、元の銃器庫跡(今の野球部部室)で希望者を集めてハーモニカの合奏に類するものを始めました。その頃に入ってきた人達の中に黒川君や井上君達がいきました。

やがて二学期頃からは形もやや整ってききましたので、リズムパートにウクレレ、ギターを使い、またアコーディオンを弾く生徒も入ってきましたので音量も豊かになりましたし、まあこれならばと、岩中ハーモニカ・アンサンブルという名称を付けました。レパートリーも増してきましたので、校内ばかりか校外にも出て演奏するようになり、招かれて東洋紡や玖珂小、藤川小、或いは広東小、広瀬小などに出かけました。

中でも宇部の渡辺翁記念講堂のステージでインオールドマドリッドと荒城の月変奏曲を熱演したことは忘れられません。

その頃、生徒の中でマンドリン・ギターを習いたいというものが出てきて練習している中かなり引けるようになりきましたので、本来のハーモニカの合奏団としては異例ですが、これ又ハーモニカ・アンサンブルに入れたのです。そして校内の音楽会の折、ハーモニカ・アンサンブルとは別にマンドリン・ギターの三部合奏を演奏したりしました。これがやがてマンドリンの合奏団を作る基ともなったのです。

このメンバーの中にマンドリンでは片山孝雄君、佐伯史郎君、ギターで三宅、福頼、木村、原田の四君がいきました。



## 2. 岩高プレクトラム・アンサンブル誕生

23年の6月頃フとした機会から、当時付設中学3年だった吉岡良三君がマンドリン練習を始め、私はテストケースとしてそのレッスンに個人的に熱意を注いだのですが、吉岡君の才能と努力によって、夏休みも半ばには、オデルの巻1を完全にものにしましたので、これに力づいてその後ますますマンドリンの練習に意欲を燃え立たせたのでした。

24年春休みには、高木、相君が連日郷里の川越から岩徳線で登校、これ又オデルの教則本を熱心に練習みるみる上達して行きました。

その頃、ハーモニカ・アンサンブルのメンバーで米村君がギターを、井上邦光君がマンドリンを始めました。井上君は、ハワイアンもすれば、ピアノも弾ける、合唱団の指揮もするといった器用人で、上達も目に見えて早かったように記憶しています。

その年の6月、山口での県の音楽コンクールに、マンドリン3部合奏の形式で初参加、

第一マンドリン	佐伯君	吉岡君
第二マンドリン	高木君	井上君
ギター	福島君	米村君

このメンバーで“森の逍遥”と“愉快な騎手”の2曲を山大教育学部の講堂で演奏しました。

器楽合奏の部で、他の吹奏楽団や管弦楽団と比較されるべきものではありませんが、これが刺激となって、よりいっそうマンドリン合奏を高めようと言う機運が盛り上がってきました。丁度ハーモニカ・アンサンブルが合奏曲に行き詰まり、部内にもあき風が吹き始めていましたので、完全に高等学校になった年でもあり、ここで本格的なマンドリン・オーケストラを作ろうと、在来のハーモニカ・アンサンブルを解散し、2学期からはマンドリン・ギターの部員募集を始めましたところ、ハーモニカ・アンサンブルでウクレレを担当していた富沢君がマンドリンを、又黒川君がギターを始めました。安藤君がマンドリンを始めたのもその頃だったと思います。

2学期も半ば頃、川西校舎の女子1年生の中にマンドリン・ギターを習いたいという希望者が出てきましたので、放課後横山校舎に来て貰い、今の会

議室で練習を始めました。

1ヶ月の練習で少しは基盤もできるようになりましたので、男子の生徒と顔合わせをして、それ以来一緒に練習をすることにしました。

そのときの女生徒は

マンドリン	安西さん、坂田さん、深川さん、岡田さん
-------	---------------------

ギター	室元さん、石神さん
-----	-----------

の6名でした。

現在では圧倒的に女子部員が多いのですが、その糸口を作ったのはこの先輩方だった訳です。

さて、2学期も終わりに近づいた頃、全員でやっと“聖夜”の合奏ができるようになりましたので、12月24日終業式の後、講堂に集まり、石神校長先生をお呼びして“聖夜”の合奏を聞いて戴き、これから本格的なマンドリンクラブを作りたいのですが、先ず合奏楽器の手始めにマンドラを買っていただきたいとお願いしたのでした。その折の合奏では、井上君がマンドラのパートを、ギターをピックでトレモロして代用したのでした。

石神校長先生から、「それでは楽器を探してごらん」とお許しの出たときの一同の喜び、さあこれから皆で協力して立派なマンドリンクラブを作ろうと大いに張り切ったものでした。

そしてここに、岩高プレクトラム・アンサンブルが呱呱の声を上げたのです。

その後、例年部で「クリスマスの集い」をしているのはこの日を祝し、かつ忘れぬための行事なのです。

3学期になって、寒い冬の日、手をこすりながら会議室で練習をしていますと、隣の校長室から、石神校長先生がご自身で火種を十能に入れて持って来て下さり、会議室の大火鉢に入れて下さったこともありました。皆、火より暖かいお心を嬉しく思ったものでした。

マンドラは呉市の中山楽器店の好意でやっと1本、鈴木製品の中古を手に入れて貰い、富沢君、吉岡君と取りに行きました。その後岩国の植野楽器店で

も1本鈴木製の中古を探して貰い、やっとマンドラが2本になったのでした。 現今進入部者が練習用に使っているのがそれです。

当時は未だ戦後といった時代で、楽器1本集めるにも随分苦労したものです。それから考えると、現

在はお金さえ出せばいくらでも楽器が手に入るので、この頃部を作るのだったらあんな苦労はなかったでしょう。

しかし、それだけに古い楽器1つにも血の通いを感じています。

### 3. 部室のこと

校長室の隣の会議室で練習していましたが、そう何時迄も会議室を使ってもいられませんので、丁度25年春から、寄宿舎の舎生の人員が減ったのを幸、早速入り口に近い空き室を部室に使うことにしました。現在の保健室がそれです。その後旧寮舎

が完全に閉鎖されて部室が又保健室になることになったので、2回の広い室、即ち現在の部室へ引っ越し、冬休みを利用してペンキ塗りをしてもらったのです。

### 4. JOFK より初放送

石神校長先生が柳井高校にいらした頃お親しくしていらしたお琴の増本先生のご尽力で広島中央放送局から放送することに4月話がきまり、皆嬉しいやら、怖いやら、ともかくそれからは連日猛練習、曲目は、武井守成の「踊る小花」と服部正の「蝶々を主題とせる変奏曲」の2曲を季節ながら選びました。

いよいよ5月5日の放送当日、皆大張り切りで汽車で広島へ。 流川の旧放送局の狭いスタジオに

缶詰になった時は皆緊張の曲に達していました。なんといても生放送なのでから始まったが最後やり直しができません。 放送が終わった折、ギターの米村君がとうとう鼻血を出してしまいました。

放送は大過なく終了、最初としては成功だったと思いました。 当時のFKの教育関係担当のプレデューサー児玉剛造氏からユニークな存在だと認められ、それが機縁となって、その後の放送の道が開けたのでした。

### 5. 大野繁氏とマンドチェロ・ギターローネ

こうして次第に合奏も充実してくると、欲しいのは低音楽器のマンドチェロやギターローネです。

折りよく吉田矢健治氏(本校先輩キングレコード専属作曲家、明大マンドリンクラブ出身)が帰郷されたので、私の学生時代、東京に大野さんという楽器製作者のあったことを話したら、その人なら息子さんが明大マンドリンクラブにいるから早速連絡して上げようとのこと、その後富山県の高岡市に疎開されている消息が知れ、早速マンドリンチェロとギターローネの製作を依頼、その8月、大野さん自身がお弟子の林さんと一緒に楽器を持ってこられました。

丁度その折、到着の電文は入ったものの到車の時間が書いてないので、井上君は下り列車が岩国駅に入るたびに迎えに出たのでした。

それ程に新しい楽器の入るのを皆待ち望んでいたのです。

その後、マンドラを年に1本、チェロを追加、マンドローネもできて現在の楽器数になったのですが、ここ数年はクラブ費が乏しいので楽器の追加購入が出来ず、合奏編成から現状ではマンドラ、マンドチェロの数が不足であり、ベースもぜひとも欲しいところ。 マンドリンは個人で大野さんに作ってもらっています。

この大野繁氏は名人気質の人で、その作品も実に立派なものでしたが惜しいことに先年世界を、残念で残念でたまりません。

今はご子息の政広氏が後をついでなかなかしつかりした楽器を作っておられます。

## 6. 安富信美氏と楽譜

大野さんが岩国を訪ねて下さったことが縁となって、大野さんを通して安富氏を知ることが出来たのは、この部の発展に大きな大きな力となったものです。

安富さんは早稲田のマンドリンクラブで私より数年後の方でしたが、東京で「こすもす音楽芸術研究所」を主催しておられ作曲などもしておられました。

われわれの部に関心を寄せてくださり、貴重な得がたい譜面を無償でどしどし送ってくださり、おかげで次々と演奏会のプログラムが組め本当に助かりました。

演奏会の曲目が乏しいほど辛いことはありません。それにマンドリン合奏の楽譜は最近でこそ平山英三郎氏の手によって出版されているものもありますが、オリジナルのものに至っては、ほとんど市販されておられません。それだけに、どの合奏団でも楽譜を入手することには懸命になるのです。

安富さんのこのご好意によってこそ、創設当時のプレクトラム・アンサンブルが無事に軌道に乗れたといっても過言ではありません。

偶然、26年の春の演奏会の前日、九州からの帰

途宮島へ寄ったからついでに来たと岩国を訪れてくださり、1泊されて翌日の演奏会を聞かれ、合奏に入って打楽器を叩いたりギター - の独奏をして下さったりしてこんな嬉しいことはありませんでした。

これから先々色々と力になっていただこうと思っていた、この安富さんも又あの世へ旅立ってしまった。大野さんよりも2年前の29年のことです。

27年の2月、私がフトした用事で上京した折、私が東京駅を発つのが見送りに雪の中を来て下さった、安富さんと大野さん、そしてそれが最後だったお二人の顔が今もこうしていると、ありありと浮かんで来ます。

このお二人は、岩高プレクトラム・アンサンブルにとって大切な恩人だったといえましょう。こうした方々を失ったことはかえすがえすも残念なことです。

## 7. 比留間きぬ子先生のこと

これも大野さんが比留間先生の所へ出入りしておられて、私どものアンサンブルのことを話されたのが、ご縁で、四国へ演奏旅行で行かれる途次、突然、私の茅屋をお尋ね下さり吃驚してしまいました。

それも3月の入学者合格発表の日、しかも私は前夜から胆嚢炎の痛みで眠れず、やっと起きたばかりの時だったのですから。

比留間先生のお言葉によれば、先生のお父様比留間賢八氏が日本に始めてマンドリンを紹介されたのですし、そのご遺志を継いで現在斯界に活躍していらっしゃる立場から、こうして地方でマンドリンの同好者のあることは嬉しいので尋ねてきたとの

こと、身に余る光栄でした。これが機縁となって、その秋岩国の音分の定期で10月に演奏会を開いて戴け比留間先生のすばらしい名演奏を聞かせて戴け岩国のマンドリン愛好者と共々に喜んだものでした。

その翌年にも今度は合奏のメンバーを多く連れて来られ三菱レーヨンの講堂で演奏されました。その日は錦帯橋見物をされたついでを学校にお寄り戴いて、部室で部員達に練習なさるところを聞かせていただきましたが、その折の“旅愁”の演奏は聞いていても涙が出るようでした。

先生は昨年ドイツに招かれて行かれ、国際的なマンドリニストとして活躍して居られます。あの無伴

奏独創は確かに至芸です。

又岩国に演奏に来てくださることがあればいいがなあと思っています。

## 8. 連合音楽会のこと

それまでは県の音楽コンクールだったのが、昭和26年以來、山口県高等学校連合音楽会となり、その第1回が同年2月、防府高校の旧高女の暗いステージで開かれました。

あいにく冷たい雨が朝から降り通して、楽器運搬に一苦労、ギターローネに雨合羽を着せて行きました。

当時2年生の吉岡君をプリモトップに、2年1年の20余名で“序曲イ長調”とムーアの“グラナダ”を演

26年2月 第1回 防府高校 序曲イ長調  
ムーアのグラナダ

26年6月 第2回 山大講堂 村の祭典、  
水車場のほとりにて

27年6月 第3回 下商高講堂 ミルタリヤ

28年6月 第4回 宇部市民会館  
スペインの印象より  
行列・ボレロ

29年6月 第5回 柳井高校 古戦場の秋  
この時器楽独奏の部で三浦孔司君  
“舞曲二短調”をマンドリン無伴奏独奏

30年6月 第6回 萩公民館  
マンドリニストの行進、  
セビラの碧空

31年6月 第7回 下松高校  
マンドリンマーチ、ミレーナ

このどれにも、それぞれ私には忘れえぬ思い出がありますが、それを1つ1つ書いていたら、いくら紙面があっても足りないでしょう。血のような日本海の夕焼けが次第に暗くなって行く中、点々と輝きだした漁火に、思わず嘆声を漏らした人達、車中

こうしたマンドリン界の大御所が岩国に来てくださったのも、その原因にわれわれのプレクトラム・アンサンプルがあったのも愉快です。

奏しました。

これを最初として、例年連合音楽会の合奏の部へ参加しています。プレクトラム・アンサンプルしては対外的に公開する機会は、定期演奏会以外には極稀にしかありませんので、せめてこの機会に県下の人達に知っていただければと、割り当て時間数分の1曲に全力を注いで頑張っています。

次に今までの演奏地および曲目を記憶を辿って書いてみました。思い違いはないでしょうか。

32年10月 第8回 山大講堂  
バグダッドの太守  
ムーアのグラナダ

この年は器楽の部のみ秋に開かれました。

33年6月 第9回 山口白石小講堂  
山嶽詩

34年6月 第10回 徳山市民館  
序曲ミルタリヤ

35年6月 第11回 防府高校体育館  
ミレーナ

36年6月 第12回 山口白石小講堂  
水車小屋の乙女達

37年6月 第13回 小野田高校  
バグダッドの太守

に大切な弁当を忘れて、帽子を車窓から飛ばしてしまったり、宿で腹痛を起こしお医者騒ぎをした人達もきつと、あの日あの時を、時に懐かしく思い起こされることもあるでしょう。

## 9. 放送のこと

前にも記しましたように25年5月第1回の放送をして以来、FKの児玉プロデューサーのお世話で同年9月、今度は録音放送をしました。曲目は“水車場のほとりにて”と“放浪”広島放送局の第1スタジオに入って、録音開始前のシーンとなった一瞬、冷房のために置いてある二つの大きな氷柱からポタリポタリと落ちるしずくの音が妙に耳についたのが忘れられません。あのころの録音はいまだ円盤で現在のようなテープではありませんでした。

その時は吉岡君のお兄さんで、神戸大学に行っておられた寛さんにマンドリンを応援して戴き、今は個人となられた古い先輩の村本新一氏にギターを応援して戴きまして、今もその折放送局の屋上で撮った写真が過ぎ去った日を懐かしく語っています。

後にこの録音が学校向けの放送で流された時、横山校舎では全校生徒を講堂に集めて、講堂にラジオをつけ、聞いても貰ったのでした。

第3回目は、やはり同25年11月、FK主催の放送討論会“終身教育はいかにあるべきか”が広島女学院高等部の講堂で開かれ、その折ステージ演奏をしましたが、それが録音されました。

第4回は、26年7月、同じく広島放送局から、NHKの第2放送で、全国中継で“山嶽詩”と“ミレーナ”の曲を、アコーディオンの三戸武氏、ギター村本新一氏の応援で放送しました。この録音が電波

に乗りましたら、大阪の関西フィルハーモニック・マンドリン・オーケストラの方から非常な賛辞と激励の便りを貰いその他、あちらこちらから葉書や手紙が来て驚くとともに、大変嬉しく、こうした未知の人々の厚意に感謝したものでした。

その後は児玉氏が転勤されたりして放送の機会がありませんでしたが、32年4月、ラジオ山口が郷土のステージの番組に入れるので学校の講堂で“蝶々を主題とせる変奏曲”“踊る小花”“行進曲若人”の曲を録音しました。

又その年の暮れには同じくラジオ山口からクリスマス用の放送録音に学校に来ましたので夕方遅く迄、お腹を減らして録音しました。

又ラジオ中国のアナウンサー田中克佳氏(かつてハーモニカ・アンサンブル時代のメンバーだった方)のお世話で録音することになり、12月の就業終業式の日の午後電鉄バス貸切で、広島に行きました。

これ又放送劇団の録音予定時間が延びて時間が遅れとうとう夕食抜きで録音、終わった時にはへとへとになりました。

近年は、スタジオでの録音放送はしていませんが、ラジオ中国のプロデューサー増崎氏が、岩高プレクトラム・アンサンブルをぜひ紹介したいと言って下さっていますから、いずれ近い内に実現することでしょう。

## 10. 定期演奏会のこと

昭和25年5月、初放送をしましたことは前述しましたが、それを機会に折角、発表音楽会を開こうと、福島先生とご相談して、合唱部と合同で、6月25日午後1時から横山校舎の講堂で、第1回定期演奏会を開きました。

その折プレクトラム・アンサンブルのメンバーは15名で、マンドチェロもベースもなかったのです。それでもって、“麦祭”をしかも合唱つきで演奏したのですから、その頃の強心臓振りには今から思えば

冷や汗が出ます。しかしそれだけ皆が張り切っていた訳だとも言えます。その当時の合唱部も20名の混声合唱団だったので、現状と比較する時、お互いに隔世の感があります。

第2回は同年12月3日に開きました。この回からプレクトラム・アンサンブルの独立した音楽会に踏み切ることとなりましたが、合唱部にも必ずワンステージ、賛助出演をしてもらおうことにして、その後今まで続いています。

第2回の折には、東京からお琴の名人衛藤公雄先生ご夫妻が、ある折のフトした約束をお忘れなく、わざわざ私達の演奏会の為にご来校下さり、特別演奏をして下さいました。

お琴によるカルメン前奏曲やモーツァルトのトルコ行進曲にはただただ驚き入るばかりで、これが在来のお琴かと思うほどでした。又その折の衛藤先生の作詞作曲による“母をたたえる歌”には会場皆さん方とともに深い深い感銘を受けたものでした。鳴り止まぬ拍手に、幾度かのアンコールの後、演奏会を閉じたときには、暮れるに早い初冬の日、校庭をすっかり闇の中に包んでしまっていました。



#### 衛藤公雄先生を迎えて

第4回演奏会記念撮影。

お琴の衛藤先生が東京からわざわざ賛助特別出演にご来校下さった忘れ得ぬ感激の日、前列右より2人目はアコーディオン賛助演奏の三戸武氏(昭和25年秋)

この衛藤先生のご来演には、石神校長先生の絶大なご尽力と、柳井のお琴の増本先生の非常なご援助によったものでした。

こうしてプレクトラム・アンサンブルの演奏会は、その発足から、幸運に恵まれていました。

第4回の演奏会の折、当部の恩人安富信美氏が偶然ご来校下さったことは、前に記しましたが、同氏が演奏会の後で、錦帯橋の再建(台風で流失後)よりも、演奏会などが気持ちよく出来る文化会

館が必要ですね、と笑っておられました。今のステージを見て下さったら、きっと喜んで下さったでしょう。本当に当時はステージづくりに一苦労したものでした。

11回の演奏会までの部員の方達は、きっと思い出されることと思います。

12回(昭和34年秋)には、とうとう講堂が危険になったので、その折の3年生の努力で、岩国市労働会館で演奏会を開きました。

翌年講堂の改築も完成し、その秋の13回演奏会からは、横山校舎の現講堂で開いています。

第1回から第4回までの演奏会で忘れられないことは、本校の先輩(旧岩中38回卒業生)三戸武氏がアコーディオンの特別演奏をして下さったことです。同氏は戦前早大在学中からすでに東宝の専属となって、有楽町の日劇のステージなどでの名演奏ぶりは、中央で高く評価されていました。

戦後大陸から帰還され、郷里の高森にご家庭の事情で居られましたのを幸にお願いしましたところ、母校のことならと快諾してくださり、しかも無償で賛助演奏をして下さったのでした。

“軽騎兵”や“詩人と農夫”といった序曲や、数々のウィンナワルツ、或いは“チャルダッシュ”から“ラ・クンパルシータ”と、そのレパートリーの広さ、その軽快な演奏は聴衆の皆さん方を喜ばせずにはおきませんでした。

当時の部員の方達の耳には、今もあの名演奏が残ってはいませんか。

微力ながら私達のささやかな善意が、こうして城山のふもと、岩国高校の一隅から、音楽会として芽生え、マンドリンコンサートと育ち、同好の方々とその楽しみを分け合って、今日まで続いてきたのでした。

## 11. 卒業生の活躍

年毎に新人部員がふえると共に、卒業部員の数も増し、最近では20名も卒業生を送った年もありました。ですから、本校のプレクトラム・アンサンプルの出身者だけでも、もう200名からのマンドリン族が、この岩国の土地に誕生した訳です。そして職場に或いは大学でマンドリンクラブのメンバーとして活躍しておられる方々も沢山居られます。

OBで組織して折られるプレクトラムのメンバーで岩国在住の方々は、週1回、水曜日の晩、市の中央公民館に会場を借り、懐かしい顔を寄せて、楽しい練習をして折られます。そしてその方達は、広島の優秀なマンドリンクラブ「アンサンプル・ヴィタリチ

オ・マンドリーノ」と提携して、或いはステージ演奏に或いはラジオ放送に活躍し、単に岩国と言った小地域に固まることなく、広く世間と交流し、プレクトラム音楽の発展に努力しておられることを、心より嬉しく思っています。

妙にコンクールについて、他団体を敵視？しがちな音楽団体の多い世間に、こんな美しい岩高プレクトラム・アンサンプル出身者のグループのあることを誇りしたいと思います。

## 12. 部の発展を祈りつつ

はじめてプレクトラム・アンサンプルが本校に出来てからここに10数余年、その間、創設当時の石神校長先生の並々ならぬご援助に力を得、忘れ得ぬ山本校長先生の暖かいご同情とご声援によりいっそう励まされそして、又現吉村校長先生の深いご理解とに恵まれて、多大の発展をして来ました。

それには又、部の本質を知り、真に部を愛する部員が年々後に続いて、部を盛り立てて来た大きな力もプラスされています。

この秋の、第15回の演奏会のステージに上がる現部員70名も、それ等の先輩の心を心として、本当に部を理解し、部を愛する者であるならば、岩高の存在する限り、当岩高プレクトラム・アンサンプルは栄えて行くことでしょう。

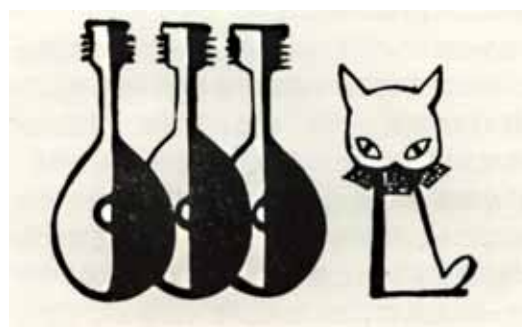
時移り、人は変われど、岩高プレクトラム・アンサンプルが、ますます進歩し発展して行くことを心から祈って止みません。

私は今日も演奏会を目指して、棒を振り続けてい

ます。あの演奏会の、最後のステージの最後の1曲を振り終えた後の耐えられぬ寂寥感を噛みしめるために……

大分おしゃべりが長くなりました。まだ何かお話ししたいことが残っているような気がしますが、この度はこの辺でペンを置きましょう。

清水（画）



### あとがき

私の怠け癖から、またまた原稿が遅れ、編集者の中村君に大変ご迷惑をおかけしたことを心からお詫び申します。

薄れ掛けて記憶を呼び覚まして書きましたので、思い違いがありましたらお許し下さい。

告

NHK 全国コンクール高校弦楽の部で  
山口県代表となる

レナータを演奏

昭和38年9月28に

幹事



### 広島児童文化会館で

広島各マンドリン合奏グループとの  
合同演奏に卒業生、在校生の1部参加  
(昭和37年9月)

### ラジオ中国にての録音

広島での合同演奏の後、  
ラジオ中国で「序曲イ長調」を録音  
(昭和32年12月)





## 思い出

私が岩国高等学校(当時は山口県立岩国中学校)に赴任したのは、戦争の痛手も未だ生々しい昭和21年の9月であった。その時は私もその深い痛手を負って京城から内地へ引き上げてきた身であった。

着任して間もないある日のことである。今もそうであるが、オンボロ校舎であったその校舎の一隅から、ふとたえなるマンドリンの音を耳にしたのである。そしてしばしその音に心を奪われてしまった。これぞ熊谷先生の指導されるこのアンサンブルの楽の音であったのである。

実は私は45年前、その頃としては珍しくもマンドリンを持っていて、人々の好奇の目に恥ずかしい思いをしながらこっそり弾いていたことがあった。この日、校舎の一隅からはからずも流れ来たマンドリンの音に、私は非常な懐かしさを覚えたのである。

マンドリンなどという楽器は戦争直後の当時は楽

## 岩高教諭 広兼弘毅

器店にたまにしか見られなかったものであり、当時のアンサンブルの楽器はハーモニカにすぎなかったのであったが、熊谷先生は異常な情熱を持ってこれに取り組み、クラブを組織して連日放課後熱心に指導されたのである。そしてしばしば演奏会などが催されるまでになり、今日では最早高等学校としては全国的に見ても有数なアンサンブルに育て上げられたことはまったく感激のほかない。

調和(ハーモニー)が美の根本理念であるとするれば、音楽はまさに美的生活を送る上にもっとも好適なものであるというよう。すさんだ人々の心を和やかにし、雑念を払ってこれを浄化するものは、音楽を置いて他には求めがたいと思うのである。

岩国高等学校の生徒が気品のある校風を身に付けているといわれるが、それはこういう影の役割をこのアンサンブルが果たしてきたとはいえないであろうか。今後ますますプレクトラム・アンサンブルの発展していくことを切に祈る次第である。

## 叱られて

### 第1回 卒 守田史郎(旧姓佐伯)

プレクトラム・アンサンブルも15回を迎え、益々充実し、向上する事は、我々OBにとっては、この上もなく嬉しい。

我々の時代には、マンドリンをペロと呼んでいた。丁度、トレモロがペロペロと聞こえるのでこの名称が生まれた。このペロも、最初からやろうと思った人は少なく、岩国高校に入学し、偶然このクラブがあった為、始めた人が多いと思う。私もはじめはハーモニカを吹いていた。パートはバリトンである。バリトンは、前打ちか後打ちで、そうでない時は1人が吹けば訳も分からぬハーモニーが飛び出すのであるが、子守唄だけは、はじめにメロがでて、聞か

せ所であった。

或る日、麻里布小学校で音楽会があった時、最初が子守唄というので田淵君と二人で、ここぞとばかりハリキッて吹いたところが、他から聞こえるのは「叱られて」の曲であった。このときは曲の順番を間違え、二人で赤面し、身のしまる思い出ステージを降りたことがあった。

又、岩国商高で市内合同音楽会があった時、マンドリン三重奏をやったが、練習の時はミラリマーチのトリオをリピートしていたが、ステージに出る直前、急にリピートしないことになった。ステージの本番で胸をわくつかせ問題の個所に来た時、隣の

片山さんはリピートして悠然と休んでいる。私が間違っていると休んで聞くと、次に進んでいる。しまった！と思ったが、今弾きだしては目立つと思いつの区切りから弾こうとした時、「こらッ」と雷が落ちた。ステージで、怒鳴られの巻第1号である。

叱られたといえば、冬の夕方図書室で小指の練習時、手がかじかんで思うように動かないと叱られた。

先生がちょっと立たれた際に、腹で手を暖めては練習したほど、つらく、思い出深い練習はない。

熊谷先生の熱心な指導で数もまし、合奏も人前で出来るようになった。

発表の前日は何月何日であったか記憶にないが、雨がものすごく降る土曜日であった。最後のステージ練習で「麦祭」をやったが、合唱と頭が合わないとい熊谷先生と、福島先生に注文をつけられなが

ら、何回も練習したのは、辛かったが楽しい思い出である。

又、第1回の生放送で、1秒1秒と近づく時間を気にしながら、出る汗をハンカチで拭いてはピックを握りなおして待ったのも思い出される。

あれこれの記憶をもとに、昔の友と逢って話すと、先ず叱られた事、つらかったことから話が始まる。そしてそれが、この上もなく楽しく懐かしい。

在校生諸君は、もっと叱られ、もっとつらい思い出をして、岩高マンドリンアンサンブルを育てて欲しいと思います。

卒業すれば、これらが思い出となり、教訓となって生きるもとの思います。（了）

## 生徒とサラリーマン

岩高プレクトラム・アンサンブル15回定期演奏会を心から喜び称えます。

3年間の高校生活ではありますが、その中で何が一番印象に残っているかと尋ねられた時、私1人ならず、同窓生一同異口同音にプレクトラム・アンサンブルの部活動だと言っております。それは、一生でもっとも成長の激しい、感受性の強い年頃に、単に技のみの習得終わらず、無意識のうちに強調を学んでいることがその大きな一要因であると思います。

この言葉を返して言うなら、強調のない部活動に終わってしまえば、プレクトラム・アンサンブルという名称からして偽装名称となり、そのような有名無実の存在は否定されてしまうでしょう。

すでに、卒業生は180名を数え、名前も顔も知らぬ先輩後輩も多数になりますが、今もなお、生活の一部に大きく影響を与えていることを思うとき、熊谷先生の偉業として称賛と感謝の気持ちでいっぱい

### 第5回 卒 三 浦 孔 司

です。また同時に、絶賛に値するプレクトラム・アンサンブルの将来を考えると、毎年毎年入れ替わる高校生に一人でも多く、部活動の真の意味を理解していただき益々部の発展に、自己形成に励み縦横に豊かな人間関係が結ばれて行くなれば、プレクトラム・アンサンブルのみの利益にとどまらず、同窓生にとっても非常に意義あることだし、ひいては個人の幸福、家庭の幸福、社会の幸福へとつながるものと確信しております。

私が今没頭している同窓会のことも、もとはすべて岩高プレクトラム・アンサンブルに入部したことに始まり、その入部も誰にもよくある一寸した動機なのですが、当時はまさかこれほど熱中しようとも趣味の主体になるうとも考えてもみなかったことでした。

幼少の頃から終戦の小学校時代まで、音楽といえば唱歌の時間くらいで、今のようにマスコミも進んでおらず、巷に軍国調の歌がある程度で、

昭和20年頃は授業も荒んでおり、およそ音楽とは縁遠いものであったように覚えております。それらしいものと思いをめぐらせば、小学5年生の時器楽合奏部に入っていてハーモニカを握りシドの順が飲み込めず皆の前で何度も繰り返させられ女の子の前で赤くなったことがありました。この時から多分赤くなり始めたのではないかと、弁解してくれる人は誰かいないでしょうか。同じ年、秋の学芸会で自分の組の合唱の指揮棒を採り「雨だれの音」を演奏した位のもので、声の方には自分でも人間ばなれした声だといって誉めてみたり、音量だけはあるとか言って楽しんでいる者まで現れ、そう言われれば職業を間違えたのではないかと思うことさえあります。

こんな上等な部類に属する思い出よりも、音楽の授業の味気なさに、何度もピンタを食ったことのほうが先に強く浮かんで来ます。昔は、先生は怖かったからね。だから、以前は、音楽といえば身震いがしたのですが、楽器には何か魅力を感じていたのも事実です。

クラブ活動も理科的なものか、スポーツでしかなかったのが、高校入学して健康の問題と主任が熊谷先生であったこと同年の入部者が少なく、それでは入ってやろうかという気持ちでマンドリンもギターも見たことがないまま入部し、7月20日頃に、3,000円の国島製のマンドリンを我が物にしたのが記念すべき第1日でした。その楽器も新町の河村楽器店から持って帰るのが照れくさく、父に持ってもらったほどの純情な少年でもあったのです。

それからは、先生と先輩と近所に吉岡先輩を得て、好環境の下に四囲の勉強勉強という声に反し進学就職の困難化に背を向けて、親の心子知らずで気がついたときは卒業しており、自分の気持ちの不満なまま職についていたのです。

高校生活は短い、例え全ての時間を勉強にあてようともクラブ活動にあてようとも、もう1年あれば効果がずっと違うような気がしてならないし、又、岩高も他校と同じく進学学校に変貌して行き、校則も厳重になり、のんびりと学校生活が楽しめなくなって

きつつあることは同情に耐えませんが、私はのんびりとした為に結果的には後手となりましたけれど、決して悔いてはおらず、かえって千変万化経験ができ、むしろ今の土壌となっていると思っているほどです。

これが高校卒業までの私の歴史のある一面ですがけれど内面的なことにも触れますことをお許し下さい。

高校卒業までは、ざっと両親という城壁の中にこれといった不自由もなく平和な幼年時代少年時代だったのです。いうならば、自分で考えることなく、支えられるものに順応し援助を受け我が儘な毎日でしたが、朝顔の茎が支柱を求めて前後左右に首を振り支柱に頼って伸びて行き、いったん支柱が折れたなら共に倒れてしまうような姿でした。しかし、この頃はこれが当たり前のことかも知れませんが、でも、卒業し就職したからには独立独歩の精神を強くして、自分の道は自分で切り開いて行かねばなりません。全てに可能性のある計画を立て一つ一つ作り上げる工夫と努力が必要だと思います。

かつての「少年よ大志を抱け」という名言を思い出し、若人否全ての人間の生きる道が示され、このアメリカのフロンティア精神が新日本の黎明期である明治時代に受け入れられ、十分に効果のあったことは周知の通でありましょう。当時の大志という言葉は、その時代流に解釈され、帝国主義的野心に活用され、血気盛んな若人を強く刺激し、むしろ野望に通じていたように思われるのです。そこで私は、逆の言葉である「小志を抱き小志に生きる」という言葉を私の座右の銘としたいと考えます。

心地よい朝の目覚め、うまいと感じる朝飯。平和な一日、幸福な家庭、楽しい団欒、楽しい仲間、幸福な社会全て小志、明日に希望あり、昨日よりは今日が今日よりは明日が前進しており、日一日と高く昇り目的の頂上に一歩づつ進み続けるのです。平凡なる者、そうです。善良なる小市民でありたいと願います。

これも自分が自分に願うことであって、他人にまで押しつけがましく申し上げることは毛頭考えておりません。

社会には平凡なる小市民が必要であると同時に非凡人も必要であります。目的の頂上を一朝一夕にして極めるならばこれは革命家となりましょう。極端な革命であれば新旧の対立はすさまじく、そこには大きな犠牲が払われ不幸も数多く秘められているのです。又、大革命家の中には時として、破壊者であったり侵略者であったり征服者であったりしますので、あくまでヒューマニストであり、勿論我々はフェミニストでありデモクラシーの原則に従って多数の人々の幸福につながっていかなくてはならないと考えます。

このように書いておきますと、これでは、意気消沈し全ては沈滞してしまい、発展のない人生になってしまうとおっしゃるに違いありません。一寸お待ち下さい。善良なる小市民にも小志なる志があります。ここでよく考えて戴かなくてはならないのは、小志を直訳して、くだらない無益な志としてしまわないで欲しいということです。当時の大志に対する小志であって、主義的歴史的解釈ではなく信の意味の大志であるなら、私の言う小志と通じ、少年はあくまで大いなる希望を持ち達成されるべく努力することが必要でありましょう。

少年は冒険好きであり、革命的ではありますが、自分の全てを知らずただがむしゃらにことを起こそ

うとします。

私もその例に漏れずある時期はその少年の一人であったらしく、現在と異なり非凡になることに魅力を感じ、安息の空を破ろうとして大義名分を真面目に考え、大人から見れば真に危なっかしい言動をしていたに違いありません。

しかし、その言動も悉く却下されるものでもなく、その原因が何かの形で何処かに存在しているものです。

そのとき、周囲の人が一笑のもとに付してしまっただけで益々少年を冒険に追いやり、かえって失ってしまうことになるでしょう。周囲の人も時にはひとつの提案として議論を戦わせ大いなる小志を与えてやることこそ大切といえましょう。

このようにして初めて、大いなる小志が達成され、明日に希望のある生活が営めることと自認しております。

最後にあたり「信念を持って努力する」を15回定演記念のはなむけにしたいと思います。

なんだか硬くて味気ないものになってしまいましたけれど、時々を感じることを考えることを、活字にして残しておくことも考えの歴史として価値あることだと考え、記念号の数頁を拝借いたしましたので皆様の寛容なるお許しを期待いたします。

完

## マンドリン弁護論

岩高プレクトラムに入部してしばらくしてから、母校の中学へ遊びに行った時、恩師の一人が、「大体マンドリンをチャラチャラやるようなやつは浮かれ者が多く、長い間やっているとなれば決定的な性格となるもんじゃ」といとも普遍的な心理のごとく言われたことがある。若く、しかもプレクトラムに入って意気揚々としていた僕は、大いに不満に思い、又、

### 第6回 卒 稲 田 勝 彦

不安にもなったが、それでも今日まで暇さえあればマンドリンを愛し児のごとく抱え、鳴らして来た。僕は元来浮っ調子だったから、マンドリンのゆえに性格が変わったとは思わない。いや、かえってマンドリンのあの哀愁を帯びた音色の故に、いささかでも世のメランコリーを解するようになったとさえ思っている。

自分の演奏を、他人はいざ知らず、自分が聞けばそれでも結構南欧の香りと微風が漂ってくるような気がするから不思議である。それと同時に、城山おろしに吹かれて今は岩国市宝となるべきあの校舎の部室の黴臭いにおいが、プンと鼻をつく気がするのも懐かしい。

岩高に入ったとき、僕は合唱部に入ろうか、プレクトラムに入ろうかと迷っていた。どちらも華やかな活動をしていて、僕としては出来れば両方に入りたい程であった。友達が次々と合唱部に入るので、僕もあわや申し込みをしようと思っていたところ、例の新生歓迎演奏会が開かれた。僕はジッと息をこらして聞き、演奏が終わるとホットたため息をついて、それから数分後にはもう熊谷先生の所へプロポーズに及んだのであった。このときも生来の浮っ調子が作用したことは間違いない。僕は未だに、これと思うことがあると前後の見境もなく突進する癖がある。幸、プレクトラムに入部したことは、瞬間的な決断にもかかわらず、僕を大いに幸せにしてくれることとなったが、俗にいう妻を娶るという場合にも、果たして同じようにうまく行くだろうか、いささか不安である。僕がまだよく見極めないうちに、その女性が歓迎演奏会でも開いたら、僕はたちかちコロリとなってしまうことは必定であるから、ここ数年はあの当時のことを思い出して大いに気をつけたいと思っている。

マンドリンは、ピアノやヴァイオリンから見れば、継子である。マンドリンやギターをよく知らない人々は「マンドリンやギターは正式な楽器ではないだろう」という。なるほど、モーツァルトやヴェートーベンはマンドリンのための協奏曲は書かなかったが、それだからと言って、マンドリンが「正式な」楽器ではないとは言えない。継子というものは往々にして、世間がそう見るのであって本人は自分を継子ともなんとも考えていないものである。マンドリンを継子扱いにしていた人が、何かの機会に、たとえば君の演奏を聞いて、その音色の持つ美しさや魅力の故にこれを愛するようになったという経験を持ったことはないだろうか。それは、マンドリンが人の心に触れる

何かを持っているからである。勿論、たとえばヴァイオリンを聴けば、僕達は感動する。しかし、その感動はマンドリンによるそれとはいささか次元が異なるのではなからうか。マンドリンの音色が僕達の心のどの部分に触れるのか、それはおそらく僕らのセンチメンタリティだと思う。ヴァイオリンが、古来真に芸術的な感情を引き出すものであるなら、マンドリンは古来真に人間的な、しかも庶民的に素朴な、感情に訴えるもと言えよう。そして、センチメンタリティという、いささか軽蔑を含んで称されるこの人間感情は、古今東西、人間離れしたものを持つのであるという事実を今一度考えてみるのである。センチメンタリティといえば、ラジオに向かって座り、流れ来る浪曲を聞きながら涙を流している僕の親父を思い出す(その親父も、今で言えば大学を出ていることをお断りしておく)。マンドリンと浪曲を結びつけてしまえば、はじめの僕の意図を裏切ることになりそうだが、つまり、センチメンタリティとは、人間の本質的な感情の一つだと言いたいのである。秋になって彼は枯れ葉がヒラヒラ落ちるのを見ると、胸がジーンと熱くなる多感な年頃から、生活苦のため五人一家心中という新聞記事を見て涙を流す老年まで、ひっくりめて人間はセンチメントの動物ではないか。感情は僕達に与えられたもともとて手近な感情洗剤である。僕自身、近頃は、ひと頃のように甘く悲しいセンチメントにほとんど浸れなくなって、ややホットする気もし、又、なんだか淋しい気もする。失われた感情を、浪曲で取り返すことは、どう転んでも僕には出来ないことだから、僕はやはりマンドリンを抱えてつかの間の感傷にひたろうと思っている。そして、ひょっとして、ある美しい女性が、僕の奏でるマンドリンの音を聞き、その人生観を変えて僕と結婚しようともなったら、僕はさらに4万円のイタリア製マンドリンを買うこともいとわれないであろう。

#### マンドリンに寄す歌

レテ越えて若き悲しみ 今一度  
運びおこせよ 丸き渡し守

## 第 15 回 定 演 に 寄 せて

毎年の演奏会が今年で15回目と聞かされ、8回目、9回目位しか記憶にない僕には、その間が空白に思える程歳月の流れを早く感じます。1回目から15回目とその年々に3年生を送り出された熊谷先生には、そのご苦勞も大変なものとし心から感謝いたします。

演奏会の度に今年こそ在校生諸君のお手伝いでも思っているのですが、一度岩国を離れまして帰る時間がままならず、最近はとんとご無沙汰している次第です。

卒業以来4年間馴染んだ比留間先生の下を離れて大阪に来ていますが、1日に1回マンドリンを握らないと気持ちが落ちつかない程に、この楽器に愛着を持つようになるにつけても、1年生時代に先生や先輩の顔色を伺いながら川西から横山までペダルを踏んだ頃が懐かしく思われます。

在校当時はそれほど感じなかったことですが、今になって残念なのは、自分がもう少し努力して月に1度位の校内コンサートを開き、部室に校内の音

### 第 6 回 卒 長 島 啓

楽愛好者を集めて、くつろいだ気持ちで、その人達とプレクトラム・アンサンブルの交友やマンドリンに対してのなじみをもっと計るべきだったと思います。それによって部員一人一人の実力を発揮させ又その成果が年1回の演奏会に発表できれば、この上ない副産物にもなります。現在の部の活動はよく存知ませんが、もしこのような機会を持つ余裕があるのでしたらやってみてはいかがでしょうか。我々は努力不足で出来なかった事ですが、現役諸君によって行われる事を望んで居ります。

プレティ同窓会にも未だ一度も顔を出していませんが、先生は素敵なロマンスグレーになられたと皆さんの噂を耳にしております。15回目の定期演奏会を無事迎えることが出来たのを機会に先生の白髪に対して20本づつの責任を持つべく在校生、卒業生一体となって先生の意思を受け継ぎマンドリン音楽の発展に尽くそうではありませんか。紙面を借りて失礼ですが、先生には今後ともよろしくご指導のほどお願い致します。

## 訪 問 記 (池ヶ谷先生を訪れて)



訪問先 池ヶ谷先生

訪問者 中尾靖夫 弘中康子  
中村雅子 中村和夫

### 第 6 回 卒 中 村 和 夫

私達は日曜の午後、世田谷の池ヶ谷先生のお宅を訪問すべく12時に渋谷八チ公の前で待ち合わせました。

当日私は頭痛がひどく、コンディションは上々とは言えませんが、高校時代からよく耳にし、私自身卒業に演奏会で「愁思」を演奏したことがありましたので、先生を訪問するという事に軽い興奮を覚えながら、重いテープレコーダーを担いで、1時間前から八チ公前に立ちました。

ところが私は弘中さんとは初対面でしたので、どうして見分けようかと心配になりました。妹が来ましたのでその件を話したら、妹も知らない始末、いよいよ事態は深刻です。中尾さんが知る筈ありませんし、いよいよ諦めようかと話し合っているとき、一人の女性が近づいて来ました。さあ出発です。

先生は世田谷の閑静な住宅街の中に幼稚園を経営していらっしゃいます。私達の訪問に快く出迎えてくださり色々珍しいレコードを聞かせて下さいました。今回の雑誌出版の話も大変喜んでくださり先生の色々な苦勞話も大変興味深く、この本に載せるためのお話もテープに吹き込んで下さいました。

先生:大変失礼ですけど、私池ヶ谷でございます。今日は中村さんがおいで下さってお友達皆さんお連れ下さって、今まで楽しくマンドリンのレコードを聞きました。それで何か話を入れるということなので、今一寸話が出たのですが、私、昔「放浪」という曲を書いたことがあるのです。これの裏話というのかおもしろいのですが、私が昔渋谷に住んでおりましたとき2階に寝ておられますとアンマさんが通るのですね、それが実に笛が上手いのです。これは後で分かったことですが、そのアンマさんは道楽で笛を流して歩くのが好きらしいのです。又笛を吹くのが自慢なのです。そのメロディが実によいメロディなので、それにヒントを得てはじめてのテーマを書いたのが「放浪」なのです。実はアンマさんの笛なのです。

中尾:出だしのメロディがそうなのですか。

先生:ええ、それがアンマさんのメロディよりヒントを得たものです。

皆さんよくご存知の「古戦場の秋」という曲がありますね、あれも面白いのですよ。

演奏会も間際になって小池氏がフウフウ言っただけで作曲をしていたのですが、解説までに間に合わないのですな、それでね、田中文雄という私の義弟になる人が解説を引き受けておられて、曲の出来ないうちに解説を書いてしまったのです。それで「古

戦場だから戦う場面もあるのだろう」といって戦いの場面も解説に書いてしまったものですから小池氏が弱りましてね、戦いはしないつもりだったということです、それでも書いてしまったのだから戦いの場面を入れるのだと言って後半に戦いの場面を入れたのですよ。笑い。

中村:その演奏会はどのような演奏会だったのですか

先生:プレクトラム・ソサエティの定期演奏会です。

中村:プレクトラム・ソサエティとは。

先生:プレクトラム・ソサエティというのは山の印象を作曲した鈴木静一氏(この人は私の方でマンドラを弾いておられてね、非常に作曲の好きな人です。)がマンドラそれに今では博士になっている大庭幸雄氏もマンドラを弾いていました。小池氏がマンドリンを弾き、私がマンドチェロを弾かされて指揮は内木正治という人で役25名くらいのアンサンブルで武井さんの第1回のコンクールに出ました。このときは私は出ませんでしたけど。

コンクールといいますが大変面白いのですが、コンクールという言葉は現在の日本人の頭の中には何でもない様に入っているようですが、その当時はコンコルソと言ったのです。フランス語だそうですが、武井さんが考えましてね、マンドリンコンコルソつまりコンクールをやったのです。つまりコンクール(コンコルソ)をやったのはわが国ではマンドリンが初めてなのです。未だその当時は日本にはオーケストラもなくテレビ、ラジオもなかったのです。ただマンドリンのオーケストラだけが合ったのです。それでね山田耕筰先生なんかもマンドリンを聞きましてね、「マンドリンでいいなあ」といわれたそうです。オーケストラも無くヴァイオリンくらい弾く人はあったけれども合奏するのはマンドリンだけだったのです。しかも京都からは同志社だとか東京からはエトワールとか有馬とか、こういう連中が10数個団体参加して、帝国ホテルでコンコルソをやったのです。そして第1回は京都同志社が優勝したのです。

その時分は非常にマンドリンが盛んで東京だけでも20個団体くらいあったでしょう。ですから今コンクールと言いますと何でもなく夏の海辺でもやっていますがコンクールを初めてやったのがマンドリンであるということは大変面白いことです。記録というものは大切なものですね。

中村:その話はいつ頃のことでしょうか。

先生:それは昭和12年頃のことだと思います。

中村:「愁思」の作曲の動機についてお話をください。

先生:大変恐れ入ります。「愁思」はですね、実は私の一番目の子供をお産の時失いまして非常にしょげてしまいましてそのときに書いた曲です。最近磯谷さん達が放送局で放送して下さいまして大変懐かしく思いました。

大変失礼いたしました。このようなことでお役に立ちますかどうか……、どうもありがとうございました。

中村:お忙しいところを大変楽しいお話を聞かせていただき有難うございました。

私は来るときの頭痛のことをすっかり忘れ、清しい気持ちで先生のお宅を辞しました。

私達は唯単にマンドリンをいじったことがあるということだけで初対面の方々にこの様に恰も旧知のごとく、接していただけたこともマンドリンの効用かと嬉しく思いました。又先生のお宅を辞すときに「芳名録」第1頁に我々の名前を記入させていただき得意になりました。

## クラブ活動の思い出

### 第7回 卒 藤 中 英 機

第15回目の定期演奏会、本当におめでとうございます。心からお喜び申し上げます。

今後とも買いを増すごとにますます内容を充実されるよう心から祈っております。

僕が高校へ入学したのが32年の春、入学するや否や、当時最上級生だった三浦先輩の所へプレクトラム・アンサンブルへの入部を申し込みに行ったのを今でも忘れません。当時は音楽というものには大して興味を持ってはいませんでした。かといって、嫌いでもありませんでした。中学時代に合唱部に入っていました。ただ先生に強制的にやらされているようなものでした。母はギターが好きで、そうする内に僕までがいつの間にかギターが好きになってしまいました。それで無理をいって買ってもらい、初めてギターというものを手にしたのが中学の終わりで、アチーブメント・テストで忙しかった頃です。その頃は持ち方も分からず、不思議にも右と左は間違いませんでしたが、いくら弦を抑えても音にならず、歯がゆさの為に投げ出したくなったことも度々

ありました。しかし、どうやらやっとな音になって来たころ流行歌のメロディをはじき始めました。はじくのも右手は親指だけで、伴奏なんて夢にも考えていませんでした。それでも結構楽しんでいううちに、知っている曲はどうか手探りで弾ける様になりました。それが中学を卒業する頃です。そのままの状態ではプレアンに入部したのですから勝手は大違い、びっくりするどころではありませんでした。それでも一生懸命練習しました。放課後毎日川西分校から横山本校への往復もそんなに苦痛ではありませんでした。

僕が合奏メンバーに加えてもらって一番最初に合奏したのが“古戦場の秋”です。当初は合奏するどころではありませんでした。ただ楽譜に目がついて行けばよいほうですので、Gマイナー、Cマイナー等のコードの組み方なんてのはまだまだでした。でも無我夢中でした。次の曲は“ヴォルガマーチ”ですが、1時間も2時間も同じ事を繰り返していました。



クラブ活動のもっとも大きい思い出となっているのは、そのことと、萩へ演奏会に出かけていったこと、もうひとつは熊谷先生にお説教されてしんみり聞いたこと。ほかにも沢山ありますが、今すぐに思い出すといたらこの三つではないでしょうか。

クラブ活動のお陰で2年間はまるで夢の世に過ぎてしまいました。しかし、3年の夏休みに突然体の調子を乱してしまい、夏休み1ヶ月間を寢床の中で過ごし、やっと新学期から通学できるようになりましたが、進学等の問題で気があせるばかりで、一時脱部まで考えて熊谷先生のお宅まで行きましたが、玄関先で何を考えたか、フイと向きを変えてしまいました。しかし、それから部活動の方は出席することも無く休むとも無く不規則な態度でした。今から考えて残念だったことは、最終年を心ゆくまで部活動出来なかったことです。

それから明大に入学しました。明大のマンドリンクラブは名実ともに学生音楽会の雄であることは知っていましたが、他のクラブは新入生を対象にした部員募集を校庭でやっているのですが、このマンドリンクラブに限って募集らしい募集はしていませんでした。後で聞いた話ですが、当クラブの受け入れ態度は入りたいやつは募集しなくても申し込みにくるといった、よほどのクラブでない限り考えられない高姿勢ぶりです。仕方が無いので部室を探して申し込みに行ったのですが、この部室のひどいのにびっくりしました。6畳位のちっぽけな部室で中には楽譜棚がぎっしり詰まっており、長イスと机が置いてあって人は10人入れれば満員になりそれ以上は外にははみ出す状態でした。岩高のプレアンの部室の立派なのに比べ、これが明大マンドリンクラブの部室かとあきれ果ててしまいました。だから部室では練習できません、決まった場所が無いので学生食堂へ行ったり空いていた教室へ行ったりで、下級生は毎日楽器類の持ち運びに大変でした。

僕達の同級生で入部を申し込んだのが約2百人と聞いていました。入部はしたものの所定の試験を受けるまでは練習生として扱われ、部員とはなれま

せん。毎日々々午前中講義を受けて、午後は本校へ重い楽器を持って電車で通いました。練習する場所が無いので、体育館の隅などへ座り込んでカルカッシ教則本とにらめっこでした。入部した早々中出阪蔵氏のギターを買ってもらい練習に励みました。

第1回目の試験が5月中ごろありましたが、失敗でした。合格したのがギタ-1人、マンドリン2人だけでした。僕が受かったのは第2回の試験で順番で言えば先の3人について4番目の部員になったわけです。それは丁度春の定期演奏の前の日でした。折もおり、この定期演奏会は第60回記念で、都立体育館に1万5千人の観衆を集めて盛大に行われました。このマンドリンクラブの人気のすごさには驚かないわけには行きませんでした。夕方6時開演というのにもう午前10時ごろからぼつぼつ列を作り出すのですら……。定任指揮者の古賀政男、清水保雄先生の指揮で大拍手に迎えられ校歌で幕が上がった時は胸がジーンとしてきました。第1部はクラシックでシューベルトの“未完成交響曲”とベルギーの“序曲イ長調”でした。このイ長調だけは高校時代にやったこともあったので満足に弾けました。第2部はギター合奏で、これには当然出してもらえません。第3部の軽音楽からはガチャガチャ音を出して遊びのつもりで弾いていました。何しろ楽譜にはオタマジャクシは書いてなく、すべてコードネームで書かれて丸で暗号を見ているようでした。第4部は出演歌手の伴奏です。フランク永井、東郷たまみ、ダークダックス、浜村真智子、青木光一、島倉千代子、藤山一郎などの出演でテープの乱れ飛ぶ中での演奏は又格別の味です。

この演奏が終わると本格的な部員となって上級生からは説教の連続です。他の文化団体での説教は知れたものですが、このマンドリンの説教は代々伝統があって有名です。もっともひどいのが春夏の合宿です。旅館へ着くや否や大広間に正座させられ延々と説教です。2時間も3時間も正座させられてはたまったものではありません。

やっとそれがすんで夕食を済ませ、すぐ合奏練習です。夜10時までたっぷり練習させられ、ひどいときには夜中にたたき起こされ弾かされるときもあります。合宿は満1週間行われ朝8時から夜10時まで楽器ばかり弾いているので頭が変になってしまいます。また3年生以下は1小節1小節一人づつ弾かされ、実力はつきますが本当に疲れます。下級生はそのほかに食事の準備、お茶くみ、上級生の寢床の準備など旅館の女中には一切やらせませんので小使い同然でした。そのことが今となっては良い思い出となっています。そのころから僕は上級生に割合可愛がられ、上級生になったときのクラブでの地位も約束されていたようです。僕が上級生から可愛がられようになってくれば他の同級生はますますひどく当たられ、見ていて気の毒でしょうがありませんでした。そういうことが部を退くことを早くした原因の一つとなっているようです。

ある日突然僕の意思が変になってしまいました。それは2年生の時の春の定期演奏会が終わって間もない日、ゴンザレスというギタリストの演奏会を聞きに行き僕の自信をなくしてしまいました。それがそのまま部生活と分かれることに直結してしまいました。どうしてこうまで大胆にしでかいたか今から考えてみて不思議でしょうがありません。部としても大分ショックだったらしく、何回も思いとどまるように引き戻しにしてくれましたが残念ながら断ってしまい

ました。あのまま部生活を続けていればまた僕の人生も今とは違った方向へ進んでいたでしょう。

これで僕の学生時代のクラブ生活は終わりです。でも何か一つ大きな思い出として残しておこうと思って、4年生になった春、岩国に当クラブを迎えて演奏会を催し、そのときには僕も最後の舞台に出て同輩の指揮で合奏できたことは生涯忘れないでしょう。

大学を卒業してこの河合楽器に入社したわけですが、やはり好きなのですね。早速社内にもマンドリンクラブを結成してしまいました。現在結成して1年余りですが部員は総勢25人くらいですが、レギュラーは14,5人とどめています。去る11月18日浜松市の音楽祭があり、当マンドリンクラブも出演しました。初めての社外演奏ですので曲は“古戦場の秋”を選びました。そのとき大拍手を浴び感激してしまいました。この曲を選んだのは先にも述べましたが、僕が最初に合奏をしたのがこの“古戦場の秋”だったからでその思い出を新たにするためです。

浜松は楽器の都市としては有名ですが、音楽団体はさほど上手いのは無いらしいです。ましてやマンドリン合奏団体おやです。だからその方面に少しでも寄与できればと思っています。熊谷先生をはじめ諸兄姉の暖かいご支援をお願いするしだいです。37.12.2 記

## 岩高プレクトラム・アンサンブルについて

### 第7回 卒 三浦秀子(旧姓中原)

岩高プレクトラム・アンサンブルが15周年を向かえるに際しまして、この部に対し並々ならぬ情熱で指導を続けてこられました熊谷先生を初め諸先輩の方に深く感謝いたすと同時に、益々このクラブの発展されんことを願いつつ私のクラブに対しての感想を述べさせて戴きます。

新入生歓迎演奏会で、初めてマンドリンの合奏を聞き“クシコ・スポスト”の曲に惹かれ(丁度母のマン

ドリンが眠っておりましたし)入部いたし今日に至るわけですが、入部当時の廊下での練習風景、川西から重いマンドリン(当時は大変重く感じられました)を抱え通ったときの気持ち、合奏に入れていただき初めての演奏会で舞台での感激、萩での演奏会の失敗、ソフト大会、クリスマス、最後の演奏会と走馬灯のように次々とフィルムは切れることなく楽しく懐かしい思い出として繰り上げられます。高校時

代の生活はマンドリンクラブでの活動が一番大きい比重を占めているといっても過言ではないでしょう。というのもこの部は唯音楽の上手な人達のみ集まりというのではなく「プレクトラム・アンサンブル」その名も示すとおり和を以って成り立っているもので、1曲を演奏することにより全員が協力し合って一つのことを成し遂げて行くという精神を養われてまいりました。多感な青春時代を音楽により心に安らぎ

を覚え、又卒業した後にもプレクトラム・ソサエティの集まりが暖かく迎えてくださる状態で、雰囲気により人間性を味わうことが出来、この縦横のつながりも他のどの部にも類を見ない尊いことと自慢に思っております。(良く同級生からうらやましいという言葉に耳にしては喜びを胸に秘めています。)

ソサエティの皆様、アンサンブルの皆様、今後とも力をあわせて部の発展に尽くしましょう。

## ねことマンドリン

### 第8回 卒 田 村 忠

僕は家庭教師で現在高校1年生坊主を教えている。英語、代数、幾何、それに化学、物理とおよそほとんどの科目を受け持たされている。受け持っている事と、完全に教えることとは元来、全然と云っていい

程意味が違う。しばしば、「こんな事は教わったことがないね。」とか「君には未だ少し難し過ぎるんじゃないかな。」などといって、体よく逃げてはいるが、時には、冷や汗なども出て、なかなか苦しい思いをする。

さて、この家に雌雄2匹の猫がいる。坊主の話によると、雄のほうは雌の子供だと言うことだが、僕など初めて見た時には、どう見てもその逆にしか見えなかった。それ程、雄の方は図体が大きく、動作が緩慢で、全く生きることに退屈した様な顔付きをしている。反対に雌のほうは、体も小さく敏捷そのもので、目の玉もキョロキョロしていて、潑刺としている。器量よしの三毛猫で、おまけにいつも化粧に余念がないので、毛がとても艶やかである。ネズ公狩りには、もっぱら彼女の役らしい。雄のほうは、ネズミが鳴いてもビクともしないで彼女にまかせっきりである。

この雌のほうは僕が行くと必ずと言っていいほど、

僕のひざへやって来る。それまでは、テレビの上とか、ストーブの前にいるのだが、よほど僕のひざが寝心地がいいらしい。最初片足を押せて、僕の顔色を見る、そして徐々にもう一方の足をソーツと乗せる。その格好といい、顔つきといいなんとも言えぬ愛嬌があって可愛らしい。僕は頭をコツンとやってやるのだが、それでも知らぬ顔で上がってくる。そして2時間あまり、人の苦勞をよそに眠りこけている。僕のほうも、冬などとても暖かいし、共利共存かななどとつまらぬことを考えたりする。近頃は暖かくなったせいか、彼女の定着場所が、テレビの上ないしは僕のひざの上から玄関の下駄箱の上に移った。僕が入っていくとジロツと一瞥をくれてから、素知らぬ顔をしている。かつては大変お世話になったことも忘れて。

坊主がマンドリンを始めて1ヶ月になる。僕が勧めたのだが、わりに熱心に練習しているらしい。先日、「鉄道員」を聞かせてくれた。うまいと誉めておいた。僕が卒業する頃に、どのくらいの腕前になっているかと思うと、ちょっと楽しみである。 1962.6.1

# ドラ息子行状記

## 第8回 卒 清 水 義 章

2年の2学期、私は三原高校より転入して初めてマンドリンなる楽器を見ました。生まれつき音痴な私には音楽的感覚はゼロ、まさか自分の手にマンドリンを持つとは夢にも思いませんでした。転校して友人と言えば森見君だけ、そんなとき彼が入部しましたので、これ自然の成り行きで金魚の糞のごとくくっついて入部してしまいました。入部した時、先輩曰く、先生は礼儀正しいので君もきちんとやらなければ叱られるぞ、まず第1日目にして驚かされた。それ以降何ヶ月間は、借りてきた猫のごとくおとなしく、日が経つに連れて、持ち前のずうずうしさで駄洒落など言って騒いだものです。

私達の同期は非常にまとまりが良く(勿論遊ぶことにかけて)卒業以来今日に至るまで、何とか、かんとか言っでは集まっています。話題といえば若かりし頃の話に花を咲かせて喜んでおります。

その際の話題を2,3拾って未来の良き日に、このページを繰ってみましょう。

朝礼になると、部室の楽器と棚に入って息を殺していた数人の不貞のやから、これも数学の先生に見つかったがね。体育祭に錦川でボートに乗ってこれ又見つかった者共。この中に清水さんがいないのが不思議とばかり言われますが、私には全然身に覚えのない事!(要領が悪いんだ)

練習の帰りに、食欲旺盛なる女性軍が錦帯橋の近くのそば屋に、よく連れて行ってくれました。勿論料金の方は各自払わされましたが、その為か同期の連中は横に成長しているものが多いようです。気にさわったらごめんなさいよ。正月には全員一致で徹夜でトランプ、花で遊び明かしましたが、今考えると停学ものでしょう。男女7歳にして席を同じうせず、これと似たものが生徒手帳にありましたね。山口の演奏会に行った際、猫の目いや先生の目を盗んで、パチンコなるものをしました。玉が出ること出

ることお陰で懐には現金がぼかぼかしていました。ところが帰りの列車から帽子を落としてしまいました。線路の遥かなたに糞のごとく落ちているではありませんか、アベベ選手のごとく走り拾って振り返ると列車は煙を残してパー。お陰でバスに乗ったり、タクシーに乗ったりした為稼いだ金もパー。悪いことは出来ないなあ。

男性軍の旅では、熊谷先生以下数名、平郡に演奏旅行に行きました。柳井より船上の人となり瀬戸内の小島を左右に見ながら、平郡に着き無事演奏も済ませ、トランプを夜遅くまでやりました。その後押入れで寝るもの、いびきで先生を悩ました者(犯人は謎)、寝言を言ったもの、寝ごと君は結婚したので、もう縁談に差し支えないね。とにかく話題豊富な演奏旅行でした。

卒業以後も、春夏秋冬何かにつけて会合なるもの催し喫茶店にたむろしていますが、年月の流れにつれて、それも女房子供を養うため各地に就職し又完全就職のために終わりにかけています。

卒業3年目には、女人禁制とばかり男性軍一同が室積に3泊4日のテントを張り、珍料理なるものを平らげました。夜は夜で瀬戸内の波静かな海に、つけるものをつけず飛び込み、安眠中の海の生物を驚かしたり(エッチ野郎!)、その間女性軍の陣中見舞いなるものがありました(きにするな!)。女性軍腕によりをかけて夜食のためと言ってサンドイッチを我々の為につくってくれました。こんな事は女性でないと出来ない事、全く男性諸君うれし泣きたいほどでした。少々オーバーですが、その夜はとにかく太陽も沈んだ事だしサンドイッチを一口するなり、うまい!うまくない!の賛否両論に分かれました。

前者の諸氏は、うまいうまいと食ったが為に翌朝トイレに駆け込む始末、全く女性に甘いからね。

女性軍頑張ってください。我々面の皮こそ厚いが、やはり人並みに胃腸はデリケートですから。その日の新聞に、今日の事故数(胃腸障害3名)と出たとか出ないとか……。

熊谷先生のお宅にも、時々押しかけ夜遅くまでお邪魔しました。先生の前世紀の麻雀のお相手をしたり、先生！明治は遠くなりにけりですね。又やりましょう。

実に愉快的な仲間です。私の岩国の生活は生涯忘

れることは出来ないでしょう。今後も同窓生の集まりを続け、マンドリンを、熊谷先生を中心として、人生観を、恋を(それはいけないかな?)、さまざまな話題を魚にして語り同窓生一同生涯の友でありたい。

(1963.10下宿にて)

## ご 報 告

暑い暑いといいながら残暑見舞いを受け、受けたと思ったら冬が来る。そんな感じの秋だから、その心細さはひと通りではない。西洋にいたことはないけれど、その淋しさはやりきれないほどと聞く。

東京に住所を置くクラブ員は数多いと思われまうのに、皆で集まって練習する機会もなく残念に思っております。上京して間もない頃、ある先輩のお供で比留間先生のお宅へ伺い、楽しい1日を過ごさせていただいた日から、時折先生のお宅に伺う機会を持ち、演奏においては迷演奏を認める私も、美しい演奏がしたいと強く思っております。

卒業後2年ばかり過ぎたある日、いつも時間を持って余す暇な学生清水さんが、良いサークルを見つけてとホクホク顔、騙されたと思いながらついて行った所が、グリーンカと言う喫茶店。入って行くと聞こえたのは懐かしきマンドリンの音でした。その店のご主人が、新宿の町を音楽で美しくしようと思って作ったマンドリンのサークル、それがグリーンカなのです。色々の職業の人達がいずれも劣らぬマンドリン好きで、唯それだけで集まっている人達……。それだけにとても気持ちの合った人の集まりで年に春秋2回の演奏会を開きます。一時はこのグリーンカが在京OBの人達に会える唯一の機会です。その頃の私はそれが楽しみで通ったものです。2人の女

### 第8回 卒 中 村 雅 子

性が卒業と共に帰郷した際に私もグリーンカを去ってしまいました。そのグリーンカで私達はすばらしき友、中尾さんを得て喜んで居ります。大分あたりからのこのこと出てきた高崎山の が、岩国の産である同属の三浦さんとうまが合い、ついに私達のフループの一員という、あまりありがたい役を押し付けられ、今では私達のグループに欠くことの出来ぬ人となっております。

マンドリンの合奏に魅せられたる私は、矢張り合奏がしたいものだと思いつつ、電車で揺られて会社通い、その中にちょっとした事で茅場工場のマンドリンクラブのリーダーと知り合いになり、何回目かの誘いに気をよくして、お友達と二人で出かけて行きました。それ歓迎してくださるのを良いことに気ままに出かけ、混ぜ返して帰ってきます。こんな私に、夏の終わり頃、お中元やらと称して、宝石入りのオルゴールを贈って下さいました。その曲名は「愛のロマンス」。そのクラブ員皆で買ってくださったとかお聞きして、とても嬉しく、役立つどころか、いい加減に混ぜ返している自分が恥ずかしい。

このメンバーは現在18名位で、先日新入生が4人入ってきました。皆さん、オタマジャクシには弱いけど、とても熱心でまじめな人達ばかり、私は行けば学生時代に帰ったような気持ちで、唯楽しく遊ん

でしまいます。

部室で練習曲を横目に、ちょっぴり悪戯心を起こしてなつかしのメロディなどとシャレタ事を思い出します。心ある人や、熊谷先生に知れるとお目玉物でしょうけど……。このクラブがますます発展しますようお願いって、暇な折々遊びに行かせて戴きたいと思っております。

最後の報告は、私の親友、村本康子、現在は木村康子さんとなり、2児のママなのですが……。学生時代は皆さんから康ちゃん康ちゃんと呼ばれ、親しまれておりました。とても可愛らしい人で、マンドリンクラブのマスコットの存在でした。こんな彼女だからメキシコからはるばるいらした父君の目にとまり、あれよあれよと言う間にメキシコに飛び立ってしまいました。なんだかとても大切なものを失くしてしまったような淋しさを味わったのは私だけでしょうか？……。あれから早くも5年の年月を迎え、いまや彼女は円よりドルに強いメキシコのママになり、この本が計画された折にも、円ではピンと来ないからドルに換算してくれとの答に、私は目を丸くいたしました。40ドル送ってくれて、これで我慢してくださいとの由、恐縮しました。高校時代には1を言えば10まで分かり合えた私達も、国籍が違うとなかなか思うようには通じません。その上私は筆不精なので、先日、ついに絶交分を受け取ってしまいました。彼女曰く、「あなたも外国の生活してみる必要があるわ、どんなに淋しいものか……。もっとも機会あったのことで、ツラツラ見渡して見るに貴女にあいそうな人は、メキシコにはいませんけど……。」と、筆

不精ゆえに大切な、すばらしい友を失ったらしい。メキシコは遠い遠い国です。手紙によるメキシコのママ振りは、とても可愛らしいものです。赤ちゃんに音感教育をしようと、マンドリンを弾いて我が子に泣かれ、「この子、音痴かしら？」などと心配してみたり(誰？赤ちゃんの音感のほうが確かだなんて！)3月3日には、コケシを飾って日本を思うとか……。遠いメキシコで私達のメンバーが、私達のことを懐かしんでマンドリンを弾いております。聞こえませんか？

今年か、来年当たり日本に帰って来るとの事、会えば絶交宣言も取り消してくれるだろうと、その機会を心待ちにしております。

高校時代の私は、よく熊谷先生から、弾けるようになったら、キレイに弾くように気をつけなさいと言われたものでしたが、唯、夢中で弾いていた私には、いかに早く指が動かせるか、いかに大きな音が出せるか、トレモロがいかに細かいか、関心の的でした。先生に小さくと言われて、唯、小さく、大きくと言われて、唯、機械的に大きく、それでも、その頃の私は一生懸命でした。比留間先生のおっしゃるハートで弾くなど、そんな考えは頭の片隅にもなかったような気が致します。遅れ馳せながら最近、やっと、どうにか心で弾きたいものと、マンドリン片手に考えております。毎年、お正月に、私達のグループは集まることになっております。できるだけ多くの方が集まって楽しい集いになることを期待しております。

## ドラ息子 の 思 い 出

### 第 9 回 卒 江 見 耕 一 郎

プレクトラム・アンサンブルといえ、まっ先に思いつくのが熊谷先生です、あまり丈夫でないお体を押して、分からぬままにマンドリンにかじりついて、いる我々を叱咤、激励し、入部から卒業まで、と

もかくマンドリンと聞けば一席ぶてるまでに育ててくださり、本当に人生のつぼみの時に、よい師に出会えて幸せだったと思います。岩高ブレアンの歴史は実に熊谷先生の愛と情熱の歴史だと思います。正直のところ、私は音楽が好きで入部したのではなく、わからない故に入部しました。そんなわけで先

生には、期待はずれと心配のかけどおしの毎日だったと、つくづく申し訳なく思います。なんとか期待に沿いたいと練習も一生懸命やりましたが、いかにせん持って生まれた音痴と鈍感、ついに克服できず、未だに演奏会は　こわいものと結びつきます。しかし、良かった、楽しかったといつも心が思い出話をしてくれます。

そして、奇妙にも発表会や演奏旅行よりも、唯ひたすらに、部室で、廊下で、打ち込んだ練習の日々のことが懐かしく思われます。

精神薄弱児の教師の道を目指す私に、今となって、マンダラを習ったことが非常に役立つ結果になりましたことを、お礼とあわせて謹んでご報告いたします。精薄児の教師として、ピアノやオルガンは必須なのですが、楽譜が読めるという偉大なる技術？を身に付けてもらったことが有難く思われます。バイエルの番号を追っているとき、あの廊下で先輩から手を取って教えてもらったことが懐かしく思い

出されます。

これからマンダリンを習われる皆さんに…特に音楽に弱い方に…一言。

“練習は打ち込めるだけうちこんでおけ、きっと、いつかそれが自分を支えてくれる日が来るだろう。”

辛くてやめたいでしょうが、まあもう少し頑張ってみましょう。

さぼりたいでしょうが、楽器とデートをしてやりましょう。

それから、好きで上手な人は、あなたの楽器がなんだか呼びかけてはいませんか？それを充分聞いてやって下さい。

一人の無能なるドラ息子は、遠く空のかなたに、故郷の錦帯橋を思い、城山を描き、そこに、わき上がるマンダリンの演奏の音に耳を傾けながら、若き有能なる皆さんに、岩高プレアンの発展を託するのです。

## 比留間先生訪問記

“ヨーロッパ旅行を中心として”

編集 清水 義章



私の父(比留間賢八)は、何とか日本に洋楽を普及させるには安く買える楽器で、洋楽のオタマジャクシを弾けるものと思って、自分の私財を投じてヨーロッパを廻りました。明治24年にハーモニカとツィターを持って帰りました。ハーモニカは現在広く普及しておりますが、ツィターは難しすぎるので、

そこで目をつけたのがマンダリンでした。

父はイタリー人のアピーレ・コルナーと言う先生に習い、マンダリンとギターを持って帰国し、その上マンダリンの指導で一生を終わりました。

私のヨーロッパ旅行は今回が初めてだったので、実は今までに3回ほど渡欧の機会があったのですが、事情がありましたお断りして参りました。昭和37年頃に、現在のシュヴァイツァー博士のもとで活躍されておられる高橋功氏が正式に渡欧のお話を持ってこられたのです。その際も渡欧手続きや書類等の関係でまたまた行けなくなってしまいました。そこで高橋夫人が大変残念がってくださいまして今から4年後には、必ず実現させるように致します。とおっしゃって下さったのですが、それが4年も過ぎないうちに実現してしまいました。ドイツ・プレ

クトラム協会のレオ・クランホー氏からの招待を受け

この機会に、私の門下生である越智君を通訳として同行することになりました。一方、私の母の病状は、あまり良い状態ではありませんでしたが、音楽家と言う者は自分のステージのある限り、例え親の死に目に会えなくとも致し方のないものであります。とうとう昭和36年8月10日に、母を残して羽田空港をあとにヨーロッパに向かいました。

私の招聘された先は“ドイツ国際音楽ゼミナール”と言う所で、西ドイツのザールブリュッケンに国立の講習会場が出来ておりました。

そこで、マンダリンの奏法を初め、指揮法、合奏法などのいろんな講習が行われましたが、大体プレクトラム音楽が主体になっております。各国では指揮者である、家族ともどもそこに住み込み、全くの合宿生活を送っております。やはりドイツ周辺の人達が多いようです。ゼミナールは規則正しい生活でした。

私共は、マンダリンの奏法を指導するという事で招聘された訳です。

21日間の合宿生活を終えまして、フランス、イギリス、オランダ、スイス、イタリアなど7カ国を歩きました。イタリアのローマ、ナポリでは、ラ・セール・カラージェ先生、ロセッペ・カラージェ先生にお会いしました。どこへ行っても、私は一応演奏はして来ました。その際「今世界で貴女程ハートで弾く人を、私は見た事がない」と言うお褒めの言葉をいただきました。

現在ヨーロッパにも指揮者は居るけれど、本当に音楽そのものを心得た人が少ないと言う事でした。カラージェ先生も「ピックの先で早い。たとえば軽業的な、機械的な引き方をする人は何人も知っていますが、ハートで弾く人は居ないと言うより、ほんのわずかしかが居ません。」と言われておりました。その意味で私を留めようと致しましたが、母が老いておりますので、私の代わり越智君を、よろしく願いして、11月22日ローマ空港を発ちました。その後、越智君もドイツの第一線で活躍しております。

マンダリンの盛んな国は、日本に次いでドイツで

ました。

すが、これについては日本の場合、たとえば傘のようなものだと思います。上に行って広がって元は細い、ところがヨーロッパは下から広がっています。日本ほど広がり方は少ないと思いますが、ヨーロッパはヨーロッパのものが流れています。日本のは、猿真似と言うのは悪いのですが、まだ本当に消化されていない様です。日本人は、日本人の頭で解釈したヨーロッパの音楽と言えば語弊があるかもしれませんが、何にしても日本で創り上げたもの、それでヨーロッパの曲を弾けば、ヨーロッパの音楽だと思っている人が沢山居ます。どうしてもヨーロッパに流れているもの、丁度私達が端唄でも民謡でも唄いますが、外国の人がどんなに真似しても、そのセンスが出ないそうです。それと同様には、向こうの音楽を日本の人は消化しています。けれども、まだまだ完成の域には達していないと思います。現在、日本が一番盛んです。又確かに良く出来ていると思います。と言うのは、先にも述べた様に、世界各国には、マンダリンの先生が居ないので。現在ヨーロッパにも、指揮者は居るけれど本当に音楽そのものを心得た人が少ないと言う事です。たとえば、ピックの先で軽業的に又機械的な引き方をする人は沢山居ますが、ハートでマンダリンを弾く人が居ないと言うことでしょう。

日本では、マンダリンはあまり優遇されていません。例えば放送局というものが、マンダリンの独奏時間などおよそ取ってくれません。私も、何十年というものの独奏時間をやったことがありません。それを言っても、大衆向きの楽団などは別として、取り上げてくれないんですね。くれないより、くれないとこれだけまだ音楽に対する偏見があると思います。

特にマンダリンに対して、これは私に何とかマンダリンの水準を上げようとする、私の悲願の一つですけど、結局ヴァイオリンなりピアノなりの楽器に近づいただけの、ボリュームのある演奏家がないと言うことではないかとも思います。でもなければ、マンダリンに対する解釈というものが、唯書生さんが物干しが、ペランダで弾いているか、合奏は学生さんがや



るんだというくらいの知識しか、放送局自体がおあ  
又放送局の認識する暇がないとも思います。それ  
には、私達がそれなりの材料を持っていかなけれ  
ばいけないと思います。私達の努力が必要です。

ドイツ辺りでは、これは上手いとなるとヴァイオリ  
ンであろうと、ピアノであろうと、全部同じ様に扱っ  
てくれます。それはドイツでは、いかに平等に音楽  
を愛し、各楽器に対して平等に熱情と誠心を尽くし  
て、その器樂を通して楽器を迎えるかと言うこと、た  
だし、ドイツの場合、マンドリンを古来のチェンバロ  
の役目に取り扱います。従ってトレモロに重きをお  
きます。全部このメカリックなスタカットで使っていき  
ます。又ディパティ、モーツァルト、ハイドン、バッハ、  
そういう知識を持って、そうしてマンドリンを古来か  
らの伝統という風な、ドイツの音楽に沿って生きて  
いるのです。

マンドリンと言うものは、習いやすい為に割合  
音楽と言うものの基盤がなくとも、何でもかんでも出  
来るので、すぐ合奏しても大変立派になるので、弾  
くと言う事に夢中になるのですね。そうではなく、マ  
ンドリン奏者と言うものは、もっともっと音楽の本当  
の勉強をしなければいけないと思います。数多くの  
オーケストラを聞き、あらゆる音楽を選び好みなく聞  
いて、もっと勉強したマンドリン奏者が出来なけれ  
ばいけないし、そうした指導者があって欲しいと思  
います。これは、ただマンドリンだけのことでなく、  
全ての器樂を学ぶ人達に共通した点だと思いま  
す。

私は、その点今の子供に夢を持って指導してお  
ります。マンドリンの水準を上げるということは、先に  
述べたことに付け加えて、音楽家としての礼儀、マ  
ナーと言うものも勉強していただきたい。それは、  
専門家だけでなく、アマチュアの人達も心得るべき  
だとも思います。他人が見ても気持ちの良いもので

りにならないと言っても叱られないと思うのです。  
すし、マンドリンの音楽そのものが高貴を増してく  
ると思うんですよ。それから、もう一つそう言う本当の  
演奏家とか、リズムといい、メロディといい、つまり音  
の下がり方一つに神経を使うような音楽家が出てき  
ますと、作曲家が動いて来ると思うのです。現在の  
マンドリンの作曲家が非常に少ないので、昔のもの  
を使っては居ますが、作曲家が、このマンドリンに  
目をつけ愛情を持って、どんどん作曲して下さった  
ら、もっとマンドリンの音楽は向上するのではない  
かと思います。それには、矢張りそれを演奏の出来  
る人が居なくてははいけないと思います。それと同時  
に、マンドリンに対する考え方、つまりマンドリンは  
アマチュアのものだと言う考え方を、一般の音楽家  
から取り去ることが大事だと思います。

それが結局、皆が普通の器樂楽器として、もう少  
し重大視してくれるのではないかと思います。そう  
すれば、それにつれて放送局も動いてくれるので  
はないかと思います。

結論として、マンドリンの奏者であり、指導者であ  
る人、楽しみにやっている人でも、専門家になる人  
は尚更音楽そのものの勉強が大切ではないかとも  
思います。

(比留間先生には、お忙しい時間を私達のため  
に下さったことを深く感謝すると共に、先生のご活  
躍を心よりお祈りいたします。又先生の意図される  
ことが深く文章に表現できなかった点、お詫び申し  
あげます。)

訪問者 中尾 靖 夫  
          中 村 雅 子  
          清 水 義 章

# 不協和音

プレクトラム・ソサエティ会友 中尾 靖 夫

## どうぞよろしく

一人のマンドリン気遣いが遙か九州の田舎からやって来て、人いきれとスモッグに煙る大東京の真中で“同志よいずこ”とそこら辺りを物色していましたところ、ひょんなはずみで岩国の方々と知り合うようになりました。その頃誰一人マンドリンの相手をしてくれる人も無く、全く1人ぼっちだった私にとっては大変な喜びでした。岩国のグループは中村さん兄妹、三浦氏、清水氏、それに土肥さん小林さんといったオールスターキャストで、皆さんそれぞれご多忙な身にも拘らずマンドリン音楽に対する情熱はますます盛んで、その熱心さは「気遣い」をもって自他共に認める私でさえ驚く程でした。この岩国グループの雰囲気には私はまたすっかり気に入って、何かと言えはすぐくっついて廻るようになり・・・はて一体俺は岩国出身だったのかいな？妙な錯覚を覚えることしばしばでした。こんな私の気持ちに通じたのでしょうか、

## 学 友

合奏の楽しさはそれを一度でも経験した人でないと、とうていその素晴らしさを理解できないでしょう。とくにマンドリン合奏は全然楽譜の読めない初心者でも熱心ささえあれば、比較的容易に合奏の仲間入りが出来るというわけで、まさに私共所謂アマチュアの音楽に相応しく、またそれ故に他の楽団には見られない独特の雰囲気を持っていると思います。マンドリン音楽そのものの楽しさもさることながら、私はこのマンドリングループに特有の親しみ易いムードがたまらなく好きです。マンドリン合奏をやっている人はたとえ見も知らぬ人でも、私には全くの他人には思えません。街を歩いていてマンドリンを大事そうに抱えている人を見かけると、つい声をかけてみたくなります。私が岩国の

昨年夏ごろでしたか「お前を岩高メンバーとして正式に認めてやる」と申し渡され大いに感激しました。これからは大いに精進努力して岩高の名を汚すことのないようやらにやなるまいと決心した次第です。どうか皆様よろしくお付き合いの程をお願いいたします。

さて、早速ながらこの度の文集発行に際して原稿を依頼されまして、慣れぬ筆を取ってみた訳ですが、小学校の時分から作文というやつが大の苦手で、原稿用紙のマス目を見るとジマシンが出来るといふ奇病の持ち主なので、しかし岩高のメンバーに入れてもらった手前何も書かない訳にも行かず、ここに一大決心をして書き始めたというわけです。どうせまとまったものは書けそうにありません。とにかく心につりゆくよしなしごとをそこはかとなく書きつづる以外に手はないようであります。

方々と近づきになったのも。このような気安さがあったからといってよいと思います。私はこんな調子で方々にマンドリンの「楽友」を作ることが出来ました。実際に顔見知りなど無くても、頭の中でちょっと創造してみるだけで、全国いたるところに数え切れぬほど多数の友達がいる事になる訳ですから、こんな愉快的話はありません。

こういう想像を楽しむことができるのもマンドリン音楽に親しんでいるからこそであって、かりに私がヴァイオリンやピアノなどをやっていたならば、とてもこの喜びを味わうことは出来なかつたろうと思うのです。それはマンドリンの持つ不思議な魅力の一つと言ってよいと思います。

## 「庶民的」ということ

マンドリンを語り、その説明がなされるとき、決まって「庶民的」とか「大衆的」といった言葉が現れます。この言葉の意味するものは甚だ曖昧だと言わざるを得ません。本来、楽器が庶民的であるということは、その楽器が万人に愛されるという優れた面を言い表しているものだと思います。ところが庶民的、大衆性を有するが故に芸術的には低級、低俗であると決めて掛かっている人が案外と多いのです。これは言葉のマジックと言うものでしょう。不用意に語られ、不用意に受け取られる言葉と言うものは、しばしば物の本質を見失いがちであります。わが国で唯一のプロのマンドリン楽団を組織しておられる小山四雄氏は、「マンドリンやギターの持つムードは、決して高度の音楽性を追うものではなく、身近な庶民性なのだ」といいます。

## 指揮者

「指揮者なんてありゃあやっぱり必要なもんかね」などと私は度々聞かれたことがあります。それが音楽のオの字も知らない野蛮人からばかりでなく「俺は音楽が趣味」だとか何とかチャレたことを言っている紳士連からもこの同じ質問を受けるのです。私がどうやって説明してやるかと回転の悪い頭をそりりそりり回し始めようとすると、「第一、だれも指揮者の方なんか見てないぜ。」と追い討ちをかけてきます。「結局、一度でも合奏の経験をしたことのない奴には、指揮者の如何に大切かは分らないだろうな。」という答にならないような答が私の答でした。いちいち理屈を並べて説明するのが面倒だったせいもありますが、正直のところこんな風に答えるほかに言いようがないとも思いました。私自身合奏のメンバーに入って初めて指揮者の重要性を理解しましたし、その後回りのものにおだてられて厚かましくも1年程度指揮棒を振り回した経験で、指揮の難しさ、怖さを身にしみて感じました。

つまり氏は庶民性という意味を芸術的に低級であることと同意義に考えている1人であります。そしてマンドリン音楽には芸術性を期待し得ないと言い切っているのです。この発言に対して私共は猛烈な反発を感じずにはられません。勿論マンドリンという楽器そのものには、音域とか音量、その他テクニックの点などで、いろいろと演奏場の制約、限界があるでしょう。しかしそのもとは音楽の芸術的価値を決定するものでは絶対のないし、またあり得ないことです。プレクトラム音楽にはプレクトラム独自の舞台があり、開拓さるべき分野があるのであって、レギュラーオーケストラが音楽芸術の全てではないという分かりきった事実を改めて考え直してもらいたいものです。

ものの本によりますと、指揮者たるものはメンバーの一人一人から、音楽的にも人間的にも信頼されていなければならないことになっております。そうすると「天は二物を与えず」などという偉大な法則を以ってしてもビクともしないほどの偉大なる人物でないと指揮者は勤まらないことになります。まあしかし、それも程度問題ではありますが、とにかく立派な指揮者の下で合奏が出来るということは最高に愉快で美しいことであります。

こんな珍説があります。指揮者は各々の奏者が勝手放題に発する音を、木の棒でもってかき混ぜ、それで音の調整、調和をはかっているのだ・・・というのです。

野蛮人の指揮感というのは、先ずこんな程度かも知れません。

## バイブル

私は生まれてこのかた20数年もの間、サンタクローズにお目にかかったことはありませんでした。私の親爺は明治生まれのガンコさでクリスマスなんぞ、「あんな毛唐のやることが真似できるか。」といった調子なのです。それでつい私もクリスマスなんかアホらしいと思うようになってしまいました。

一昨年のクリスマス・イヴの日でした。会社の同僚達はやれパーティだ、やれダンスだとかわめきながら西に東に散って行った後、私は一人神田の古本街でホツつき歩こうと思い立ちました。一人でどうしようもないときはよく出かけるところなのです。目指す本屋は決まっております。それも4年前ほどから。つまり私は神保町の四つ角から程遠からぬ古賀書店という音楽専門の古本屋に、武井守成著「マンドリンギターおよびそのオーケストラ」という本を探すために4年間も通い続けていたのです。この本は皆さんご存知のとおり数少ないマンドリン研究書の1つで、まさにマンドリンのバイブルともいべき貴重な本であります。その日も先ず一目散に古賀書店に飛び込んだのは勿論です。しかし、なに

## レコード

合奏の練習が終わった後は、なんともいえない気持ちよい充実感を覚えます。2時間あまりの緊張から開放されて、あれこれと練習の出来、不出来を話し合ったり、世間話などに打ち興じる時は、合奏のときとは違った格別のような気持ちになっていました。

練習の帰りにはよく喫茶店に寄りましたが、それもお茶を飲むためよりも、素敵なかムードの中でマンドリンのレコードを聞くためなのです。その店は一番奥の方がレコード鑑賞室と言う事になっておりましたので、周囲の話し声や雑音を気にすることなく鑑賞できたわけです。そこで決まって聞くレコードがご存知の「マンドリンの幻想」という盤です。そ

しろ4年もの間この本やさんは私の期待を裏切り続けてきたわけですから、もういい加減あきらめなければならぬかなという気持ちもありました。例によって例のような順序でうす汚い書棚をなめるように見ていきました。ところが皆さん、私が夢にまで見たあの赤い表紙がちゃんとその背をこちらに見せているではありませんか。思わず「アッ」と声を出してしまいました。周りの客や店の主人までびっくりしてこちらを向いたのを覚えております。このときの嬉しさ、一寸私の拙い表現では到底お伝えできません。いくら大げさな表現を使ってもまだ言い足りないのではないかと思います。確か800円だったと記憶しています。あまりの嬉しさに「つりはいらないよ。」と言おうと思いましたがやはり考え直してお釣りはちゃんと貰って帰りました。

とき、あたかも12月24日、長年サンタクローズを信じなかった私も、このバイブルを小脇に抱えて帰る途中には、もう大声で『メリークリスマス』と叫びたいような気持ちになっていました。

のうちに私共がその店に現れると、黙っていてもこのレコードが流れ始める位になりました。

しかしよく飽きもせず何十回となくこのレコードばかり聞いたものだ和我乍ら感心しています。最初に聞いたときはたいした感動もなかったのですが、だんだんと会を重ねて聞いて行けばいく程、益々この音楽のすばらしさに取り付かれるようになりました。この盤はシシリー島での現地録音ということなのですが、本当に目をつぶって聞いていると、明るい太陽に輝く地中海や、夜の静けさの中から聞こえてくるゴンドラの櫓のきしみなどが自然と想像されてきます。コーヒー飲んで

イタリーへ・・・なんていうのは、どっかの  
おわりに

現在我国マンドリン界の中心が学生団体にあるということは、一応認めてよかろうと思います。昨年12月に学生マンドリンの全国組織が結成され、カンダの共立講堂で盛大な記念演奏会が催されましたが、全国各地のクラブが一堂に会して、実に意気盛んなすばらしい演奏会でした。今年の夏には又この中から選抜メンバーをつかってアメリカ演奏旅行をやるとかで、とにかく大変な鼻息であります。しかもほとんどの大学が、東の慶応、西の関学、同志社の影響を受けてか、いわゆる純正プレクトラム音楽の研究に徹していることは喜ばしいことだと思います。しかし学生音楽は所詮学生音楽なのであります。つまり学生たるものはわずか4年の在学期間を過ぎれば卒業してしまう訳ですから、彼らに高度の芸術性、音楽性を期待するのは無理というものです。彼らもまた自分自身の限界を十分自覚して謙虚な態度で活動を行うことが望まれます。この意味から、学生時代にクラブで活躍した人は、ひきつづき社会人となってもこの情熱を絶やすことなく、むしろこれからが本当の勉強だと考えて一生マンドリン音楽研究に励んでもらいたいものだと思います。

## マンドリンクラブの皆様へ

卒業後ご無沙汰ばかり致しまして申し訳なく思っております。現在プレアンが益々発展し、部員も多くなっていることを聞き、大変嬉しく思っています。

幸にも卒業後もマンドリンをいじる機会に恵まれ、ミレーナ、古戦場の秋、スペインの印象、などなど高校時代を懐かしく思い出しながら演奏しております。来春は私達同志社

ウィスキー屋さんの宣伝みたいです。

ところで一般にいし職場の団体の活躍も近年目覚ましいものがあります。学生時代と違って一応社会人ともなればなかなかこうしたグループ活動は出来にくいものです。第一、週2回の定期練習に参加することがすでに大変な努力を要することになるのです。しかしそういったさまざまなハンディを持ちながら、なおかつこれ程各地で盛んな活動をされているということは、同好者の一人として誠に喜ばしいことと思います。学生連盟のような全国組織は未だないようですし、せめて楽譜の貸与や、実費配布などのいわば楽譜センターとも言うべき機関が出来れば、全国の愛好者はどんなに喜ぶことでしょうか。岐阜の伊東尚生がすでに小規模ながらこういった楽譜の融通を行っていますが、誠にあり難いことであります。

我国マンドリン界の今後の大きな課題の1つは、この新しく伸びようとする全国のMCに何とかして楽譜を融通する方法を考えることではないかと私は思います。

### 第10回卒 広兼和子

大学マンドリンクラブの長い間の望みでありました、岩国での演奏会を実現できそうなので、その節はよろしくお願いします。

今後も皆さんと一緒にがんばって行きたいと思っています。

会誌をお世話くださいます方々に心から感謝しています。クラブ並みにこの会の発展を祈ります。

## プレクトラムに想う

兼 敦子

1週の1番楽しみに待つ“金曜日”。入部当時から愛用のマンドリンを持って、練習場へ急ぐ。今日では、生活の一部となって私の心を支えてくれるマンドリン。歩きながら苦しかった4年前の基礎練習を思い出す。マンドリンを右手に、左には重いカバンを持って4時過ぎ川西校舎から部室へ。廊下での“オデ

ル”練習、上級生の手を取っての指導も、楽器も指も思うように言う事を聞いてくれない毎日が続く。左の指先は皮が向け、かたくなり痛い。本当に何もかも投げ出したいこともあったが、先生や先輩の励ましで、今では楽しい思い出となった。これからも部の皆さんと共に心も腕も磨いて行きたいと思います。

## マンドリンを手に

クラブ員全員が  
手を取り、手を繋ぎ  
クラブの発展と充実に  
協力し  
共生、共栄することを歌う。

春には若人を迎え  
夏にはともに勉強し

### 第11回卒 土井哲子

秋には小さな演奏家を  
冬にはそれを送り出す。

楽しさの後には苦しさが来る。  
厳しい練習の後には楽しい演奏会だ。  
中途にして力尽きることなく  
さあ！  
マンドリンを手に立ち上がろう。

## 北上川夜曲

雄大な楠の木の枝越しに岩国城の白い明かりが、まだ夜の帳りが降りきってない今、わずかに薄暗い空の色と区別できるくらいに燈っている。又今日も月が出ぬだろう今宵も静かに幻の姿を浮き彫りにしてくれることだろう。僕も静かにプレアン時代を思い出してみよう。

しかしこの春高校を卒業したばかりなのになんとはるかかなたに去ってしまった感じがすることだろうか。僕には、しかし、すぐにその当

時の心に帰れることが出来るものがある。今手にしている一枚の楽譜がそれです。マンドリンとギターのパートと全く朴訥な言葉が並べられている詩が載せられています。之から次から次と色々な人々そして出来事が浮かんできます。やはりもっとも忘れることが出来ぬのは3年のときの定期演奏会当日とその前日でしょう。今でもはっきりすべて憶えています。熊谷先生の指揮を受けることが出来ないと知らされてから

### 第12回卒 小東孝幸

全く夢中だった。最後の総仕上げの練習の時3年生がかわるがわる指揮をした。そのとき僕も振らさしてもらったが随分足が震えて仕方がなかった。しかし一人一人見渡すことだけは忘れずにした。その夜塩谷君宅で福島先生とともに明日の指揮をお願いする富永さんと一緒にみんなで自分達の最後の舞台について熱心に相談しあった。インスタントするこのそのときの味も忘れられない。もう8時過ぎであり腹の空いていた僕達にいなり寿司がご馳走された。残念ながらこの方の味は記憶することが出来なかった。

演奏会当日松前さんが司会をして下さり、前夜の相談は結果的には無為に終わったが一人であるのが淋しくてたまらなかったときだったので僕にとってはとても大事なことでした。当日の思い出は先輩富永さんと古戦場の秋の打楽器の箇所を半分ずつ叩いたことです。しかし残念なことに一度鳴らしそこない一度しか鳴らすことが出来ず、2度無事にパーンといかれた先輩に負けてしまった。固い気持ちをほぐす為どちらがいい音が出るか半分ずつ鳴らそうと初めてのリピートの中を富永さんが繰り返した後を僕がやったんだが音どころの問題ではなかった。

皆の演奏にうっとりしてしまって手が動かなかった。しかし後日又古戦場の秋の打楽器をすることができ、このときは先生の指揮で思いっきり鳴らした。

型通り記念写真、茶話会を済ませた。塩谷君が眼鏡をはずしながら先生宅から出てくる姿を見たとき極度の緊張がそのまま体をこわばらせた。それですべて終わったのだ。後日その日指揮をされた富永さんは怖い顔をしてすぐ寝られたそうだ。随分精神的に疲れられたことだろうと思う。それなのに又々疲れさすことをお願いした。それがいま手にしている楽譜です。現在の気持ち又プレアン時代の思い出を何とか形に残しておきたかった。そんな毎日の中のある日夢中で言葉を並べあげた。詩なんか全く作

りもしないし興味のなかった自分だったがそんなときには作り出せるだけのものがあり余るほどあった。むろん滑らかさのない固い言葉ではあったけどそれにたまらなくメロディが欲しくなりすぐに富永さんをお願いした。手紙を出した後すごく自分の行動が恥ずかしくなった。笑われるだろうと思うとたまらない気持ちでいたがある日固い封筒を受け取ったときはものすごく喜んだ。何度も何度も弾いてみた。とても素晴らしかった。又しかし考えてみた。1年ももう前に去られた人がどうしてこんな自分の欲してたそのままのメロディが作れるのだろうか。かってプレアン部員なら誰でもできるといったものではないと思う。自分の過ごしてきた日の甘さに情けなくさえた。

自分だけのものにしておくのは惜しい気がして共に1年生の時のクリスマスの日「カラスの赤ちゃん」を真っ赤になって歌った本田君、倉重君に見せると彼らはその楽譜を写し取ってくれた。それが又非常に楽しかった。

楽しかった思い出の最たるものはやはり3年の時の山口市で行われた山口県高校連合音楽会に行ったときでした。汽車に乗ると同時にあちこちでトランプが始まっていた。僕もこの日に備えてベニヤ板で将棋版を作りそれを2つに切ってバッグに入れ岩国を離れると同時にセロテープで繋ぎ足して名人戦を開始した。しかしそのベニヤ板がAさんとB君とによってハサミ将棋に使われるとは考えてもいなかった。それは帰途藤生辺りで車外に投げ捨てた。当時はダークダックスの北上夜曲が流行していた時であり宿でも盛んにそれをした。においやさしい白百合の・・・何度聞いても弾いてもいい、いい曲だった。その夜は又リバイバルを大いに弾いた。楽しく大いに歌ったものだった。今年又現役の人々と一緒に小野田高校に行くことに恵まれたが一向に元気の出ぬ姿に申し訳なかったと思っています。

マンドリン合奏の楽しさを味わえたのはやは

り高校時代だけです。僕はマンダリンを弾く楽しさよりもクラブ活動におけるマンダリンがたまらなく好きだった。高校時代もときびしく練習しなかったことが悔やまれますが大変幸せな高校時代をすごせたことを幸に思っています。僕にとってこの様な楽しかった思い出はこれから先もうないだろう。あまりにも高校時代の心と現在の心に差が出来ているなど自分でも分かる現在の生活、どちらがいいか分からないが美しさは高校時代だろう。しかし苦しいことも随分あった。そうしたものがいまだ懐かしく楽しかった思い出として変わらないのはやはりまだプレアンを去って日が浅いためだろうか。しか

し年を経ることによって1つ1つの出来事をすべて美しく楽しい思い出へと変えることはあまりにも無責任だと思う。又決してそうなりはしないだろう。嬉しかった事、悲しかった事などすべて心から感じ得ることができた1つの半の部室、素晴らしい部室でした。

楽器置き場それが又教授の研究室である現在の生活であるが、卒業するまでにはゴロンと横になれる自分たちの部屋を作りたいと思っています。

さっきまで不気味に白くかすんで見えていた幻想の城の光ももう消えています。明日の夜に又燈してくれるでしょう。 - 完 -

## 思 い 出

ギターを始めて、もう2年と8ヶ月になろうとしている。その間は、長いようで短かったように、覚えているけど、私だけがその様に思うのであろうか？

入部しだちは、練習がづらいし、又それ以上に上級生がこわくて（本当に恥ずかしくて）道で出会っても逃げる始末であった。この様な状態なので練習に行っても手が上がらず、面白くなくなる一方なので、いつやめようか、いつやめようかと思案に暮れていたがいつの間にか1年間で過ぎてどうにかこうにか演奏をするのに、ついて行けそうになった。一人で弾いているのと違って責任感がたぶんにいるし、それ以上に面白さがあった。最初の曲は、フォスター歌曲集であった。いまでこそスラスラと弾けるが、あの時は、楽譜を見るのに精一杯で、先生の顔なぞ見る余裕もなかったようである。思い返せば、色々と思ひ出があるが、特に嬉しかった事というのは、やはり山口で行われた連合音楽会であると思う。別にあがる様子もなく練習の時と同じ調子で最後まで演奏できたことであ

### 第 1 2 回 卒 広 兼 嘉 代 子

る。最高までは行かなくても、その一歩手前まで行ったのだと私は思っている。この時を思い出して、今感心している人がいるのではありませんか？・・・次に同窓会が素晴らしいと思った。年齢の違った又初対面の人々がプレアンというクラブの中で楽しそうに意見を交換し合っている様子は、なんともいえないものがありました。このとき初めて、このクラブに入っていて良かったと思った。残念なことと云えば、私達最後の演奏会に熊谷先生が病気になられて出席されることが出来なかった事であります。このときに限った事ではないけれど、先生がおられないと、なんとなくフワフワして落ち着かないのは、どういうわけであろうか？ 私の場合は親と同様に心の支えになっているのでしょう。とにかくあの秋の演奏会の時は、淋しい気持ちで一杯であった。卒業して猛演奏会に参加することはないと思って失望しかけていたが毎週1回みんなが集まって行うのに、行くようになってからは、早く金曜日に来ないかと、待ち遠しく感じる様になった。とにかく楽器をいじって



いたら楽しいのだから面白い話である。これから楽器をいじって、皆さんと一緒にやって行きたいと思っています。

## 岩国地区の活動について

岩国地区幹事



昭和36年春 プレクトラム・ソサエティ臨時演奏会

岩国地区では、20数名位の常数で帝人のマンドリン・クラブの中に入れて頂き、毎週金曜日に帝人の練習場で練習しております。毎年1回は、帝人の結核療養所に慰問演奏会に行き患者さんに聞いていただいています。演奏がすむと列車の時間まで、病院の人達とソフトボール試合を催し大いにハッスルしております。楽器を抱えての、汽車の旅と言うものは、学生時代を思い出して懐かしくもあり大変楽しいものです。昨年より広島で、マンドリン・フェスティバルと題して、広島各地の職場の人達と合同(70数名)演奏会を催すことになり、第1回は広島の子童文化会館において盛大に行われました。その際、岩国からの責任曲目は序曲イ長調とムーア風のグラナダでした。その他、広島のヴィ

タリチオ・マンドリーノの賛助出演など、熊谷先生を中心に活躍しております。

岩国地区も、夏が一番活気づき、それも帰省された先輩後輩諸氏が一堂に集まるプレクトラム・ソサエティ定期演奏会を目標に練習に来て下さるからです。我々の演奏も、お客さんに聞いていただくのは二の次といっても言い過ぎではないでしょう。熊谷先生の棒の下に、それぞれ学生時代の部室を懐かしみ合奏し、巣立った顔々を懐かしみ歓談し、来年もこの場で会おうと約束し別れて行くのが楽しみなのです。出来るだけ多くの先輩諸氏のご参加を心より願っております。

皆の憩いの場としましょう。最後に皆様のご健康とご幸福をお祈りしてペンを置きます。

# プレアンで感じた事

越智洋子

プレクトラム・アンサンブルに入って一番楽しかった事、と言えばやはり合奏だといえると思う。マンドリンを聞いていても一番頭に浮かんでくるのは合奏なのです。自分は弾けなくとも、友達と合奏しているだけで楽しかった事を思い出します。思い出すと云えば連合音楽会へ言った事、秋期演奏会、その前の練習など色々と思い返すことが出来ますが、それも皆で弾くという喜びがあったからこそ3年間プレアンに入っていた、といえると私は思っています。今でも時々マンドリンを取り出して弾いていますが、あの合奏の味は忘れられないものです。一人で弾いていてその気持ちますます強くなりました。時々「若人」を口ずさむと他のパートの伴奏まで出てくる始末です。一人で弾くと他

のパートは全然聞かれないという事は実にさびしいものだと思います。

1年生のときの廊下での練習、初めてマンドリンと言うものを手にしてから3年間良く続いたものだと自分でも驚いています。家では3日続けばいいと言われながら2年間と言うものは川西から横山へとよく通ったものだと思う。試験中の練習のないときの物足りなさ、今でもよく覚えています。3年間良く続いたものだと思うと同時にもう少し練習すればよかった、と思っています。高校の3年間、合奏の楽しさがどういふものであるか、ということが少しでも分かったような気がするだけでも無駄ではなかった、ということが1年間プレクトラム・アンサンブルに入っていて感じたことです。

-- 現役より --

## 1) 思い出

長い長いと思っていた高校生活も、もう2年半、今では、名ばかりではあるが、最上級生として最後の半年に、あれもこれもと望みをかけ、少々あてている今日この頃、私のせめてもの慰みとなっているクラブ活動の思い出を探ってみることとした。

忘れもしないあの新入生歓迎演奏会、私は、そのとき、何の曲を演奏されたかは、全く覚えていないが、はじめて聞くマンドリン演奏に、唯、聞きほれているうちに、いつの間にか、自分もあんなに弾けたらいいなとそればかり考えていたようだ。そして次の日のクラブ総会においては、岩高プレクトラム・アンサンブルのメ

## 3年 女子部員

ンバーとして、小さいながらも端の方に名前を入れてもらった、こうして私のクラブ生活は始まったのであるが、雨の日も風の日も、川西から横山までの行進(男子の方には、分からないでしょうが)は、なかなか大変なものであった。そして、私にとって最初の高水高校での演奏は、2年生の後について出たのであるけれども、今、自分が何を弾いていたのか分からず、汗は流れ、眼鏡は曇り、ただステージに上がった記憶だけである。

今、私達は、10月14日の演奏会のために毎日練習に励んでいる。1年の演奏会には、反省の時、「進んでしようという心がない」と先生

におこられ、なんだか悲しくなりしくしくしながらパンをかじったこと、2年の時は、泣かずに食べようと思っていたが、先生が、ご病気で指揮をされなかったので、今度はしょんぼりと。

私の嬉しいとき、難しい所を満身に弾けなくても自分で一生懸命弾き終えて、ほっと先生の

THE END

## 2) これからの抱負

3年生も間髪をいれずで離部され、いよいよ、我々1, 2年でこの伝統あるプレクトラム・アンサンブルを運営して行くことになりましたが今までわずかの人数で、100人近いこのクラブをよく統制され、ますますより立派にされた3年生所先輩方の努力に対し、不敏な私達が今後、どれだけの事が出来るかと考えて見ますと、何か不安な感じに襲われ、私達に課せられた義務に対しての責任の重大さを痛感せずにはいられません、3年生方に少数で出来ましたことを、

顔を見る時、演奏中の先生の顔は、一番怖い、又一番私を落ち着かせてくれる。そして私は、悔いのない演奏会ができることを望みながら、又私のクラブ生活の思い出を記すことによって私自身の生活を反省しながら筆を置く。

### 2年 藤井利和

多数の私達に出来ないことは決してないと思います。全員、一致団結の志を持って協力してやれば、3年生方の大成に、勝るとも劣らない成果を私達の手で必ず成し遂げられることと思います故にこれからの私達に一番大切な事は、一致団結の志で、これと熊谷先生のお力添えを加えまして、古い先輩方の伝統を保持すると共に、今後のクラブの発展に最善を尽くし、ものプレクトラム・アンサンブルを先輩方の時よりも一層立派なものに必ず致します。

## 3) 感想文

「プレクトラム・アンサンブル」聞いただけでも興味を引かれ、入部したくなりそうなこのクラブに入部して、誰もが、共通に感じた事は、封建的だということでした。初めての日には大げさに言って怖いとさえ感じました。何故かと云えば、部の雰囲気がそうであって、その上、入部して間もない頃にお説教されたことが、何よりもクラブの様子というのか、クラブそのものを一度に知らされたようで、驚きました。その後は、1つの行動につけても、ものの言い方につけても、気を遣い、内心びくびくしていました。でも今残っている私達には、きびしく叱

### 1年生部員

られた程プラスになったと、思っています。

今日まで約半年の月日が過ぎましたが、部員の方とは、あまり親しくなれていないのが、不思議に思えます。ただ名前と顔を覚えたばかりです。こんな次第で時には、弦を買うのも、おっくうになることもありました。今後は用件くらは、すぐ話せるようになりたいと思います。

最近演奏する曲も増し、それだけ、叱られたり、注意されたりすることも増したのですが、そんなとき、頭から、「へただ」「つまらん」としかりつけてくれる方が、後で、出来るようになったときの喜びも又違ってきます。その点

は私達のクラブは十分です。時には悔しくてたまらないことも、悲しいこともありますが、1曲1曲、弾けるようになるごとにそれを忘れて、喜びました。

私達はこのクラブに入部した事を、決して後悔していないつもりです。(ただ1つ、つらいのは川西から横山までの道です。雨の日などは足が思う様になりにくくて困ります。)

## 岩高新聞より

錦川をバスでさかのぼること約3時間、青々とした畑の中に、かやぶきの家がポツンポツン。それでも全体的に見ると、やはり1個の集落だ。その名を「宇佐」と言う。熊谷先生を初め我々ブレアンの男子部員10数名が、当地に招待されたのが8月7と8の両日。7日の昼前に錦帯橋を出発し山道を揺られて、バスの停留所なる周防宇佐に着いたのが、午後2時。我々を招待してくれた本校出身の先輩が、早くも迎えに出ていた。バスが混んでいて暑かったためか、降りるとすぐにも冷たい高原の風が汗とほこりにまみれた、我々の顔や手をひんやりとなでていった。「涼しい、いいところだなあ。」宇佐に着いて皆が最初に発した言葉である。

そんな冷たい風の感触に浸っていたのも束の間、又重い楽器を手に、肩に、丘の上にある宇佐中学校へと足取りを速めた。学校では、家庭科室を借り、荷物を降ろし、一息入れた後は、楽器をいじるものあり、弁当を開く者ありと、にぎやかだった。夕方近く先輩に案内されて赴いたのが、地区の名所で、滝が落ちているところであった。我々のような、町のむさくるしいところに住んでいる者にとって、滝のある涼味満点の風景は、正に絶景であった。夕暮れ迫る頃学校に戻り、明日の演奏を控えてと、猛練習。

昼頃の涼しさに比べて、夜は少々むし暑かった。そして12時頃には皆、床に入った。田舎での夜を、友と一緒に過ごす……そんな光景が、なんとなく楽しかった。

翌朝5時半には全員目が覚めた。どの顔も、昨晚の睡眠不足でか、閉まりがない。8時になると、登校日なので生徒が続々とやって来た。9時、いよいよ講堂の幕が上げられた。講堂といっても、さほど大きくなく、本校の体育館程度。それでも、小中学生、一般の人を合わせて300人は入っていた。「フォスター名曲集」に始まり、小中学生のよく知っている曲「浜辺の歌」「月の砂漠」など、10数曲を演奏し、大喝采を受けた。一応の任務を終え「ホッ」として時計を見ると、もう11時を回っていた。昼食は、昨日の滝で、先輩と一緒にハンゴウスイサンをすることになった。涼しさのためか、食欲倍増。先輩後輩入り混じっての和気あいあいたる時間もあまり長くは与えられなかった。山を下り学校を後にして停留所に向かった。4時発のバスに乗りわずか2日の旅であったが、楽しい思い出を胸に、宇佐に別れを告げた。

この様にして、高校時代のよき思い出を、もたらしてくれた宇佐の先輩の方々には、深謝せずにはいられない。

## 熊谷先生アルバム集



(左上) 川西校舎でのソフトボール大会(昭和31年)

タマにじゃれついたミキネコさん、ごきげんね、さあ、アンパンを食べましょう。

(上) プール開きにて指揮(昭和32年)

先生の泳ぐの見たことない。まさかイヌかきでは、あるまい、ネコかきとは？

(左下) 運動会に指揮する先生

澄み切った秋空の下で、指は天を・・・ステキ！

---

## 編集後記

大変遅くなりましたがやっと出版の運びとなりました。一日千秋の思いで待って居られたソサエティの皆様には冷めたお茶でも飲まされるような不快感を感じずる人も多いことと思ひ、自分の大責を果たし得なかったかことに対して痛切に自己批判しております。そもそもこの事業を始めた第1の目的は第15回定期演奏会を迎えたプレクトラム・アンサンブルをこの辺りで反省して今後の発展を期待するということであ

### 発端

私が大学を卒業した年でしたから36年の春と思います。同窓会の席上で三浦さんたちと相談したのがきっかけでした。そのすぐ後行われたプレクトラム・ソサエティの臨時演奏会の席上で話が具体化されて私と田村忠君、中原秀子(現三浦)が幹事に選ばれました。私が東京地区、三浦夫人が岩国地区、田村忠君が関西地区

りました。しかし私の実力不足より記念事業としての価値が薄れたことに対して深くお詫びいたします。しかしプレクトラム・アンサンブルの再認識の意味において十分価値があると信じております。

ではもう一度この事業を始めた動機などについて記してみましよう。

ということでした。

当時はまだ三浦さんも在京中で色々と骨を折って下さって募金、原稿募集を始めて下さいました。原稿、募金とも連絡がなかなか上手く行かず、その作業も遅々として進まず、三浦さんより大変お叱りを受けてしまった。学生時代の気安さで簡単に引き受けてしまった私は就職後

の生活がなかなか思うように活用できないこと

### 経 過

先に申しましたが出版の遅れたことの言い訳をここでどくどく書いても仕方ありませんのでその経過のみ記すことに致します。

ぞくぞく原稿、募金が集まりましたのが昨年暮れでした。病気で寝込まれました熊谷先生も無理をして執筆くださり、校長先生もわざわざご投稿くださいました。残すは比留間先生と池ヶ谷先生の原稿でほかはほぼ整理でき、約8万円(約8万円の募金がありました)の予算で

### 表紙のデザイン

当初私は岩国の錦帯橋の写真を入れる計画を持っていました。適当な写真を入手できず、結局清水君と相談の結果、第15回定期演奏会の写真を入れることにしました。又本の題名につきましては熊谷先生の原稿からそのままいただくことに致しました。

この写真の入れ方については清水君と私で意見が対立してなかなか纏まりませんでした。結局私の主張を通りしてこの表紙のようなものになりました。清水君のデザインで私は写真の中で演奏者と観客と一体に入れた方が良いと主張したのです。それは今までのプレクトラム・アンサンブルの進んだ道および之から進むべき

### 終 わ り に

お忙しい中を投稿のために時間を割いてくださった校長先生をはじめ熊谷先生、諸先輩方に厚くお礼を申し上げます。又ご多忙を我々の訪問に快く応じてくださった比留間先生、池ヶ谷先生に厚くお礼申し上げます。編集に際して我々在京同窓生と友好を結んでいる中尾氏もよく後押しをして下さり、清水君がよく手伝ってくれてこの記念誌も難産の末、やっと産声を上

を知って大変残念に思いました。

印刷することにして大体整理できたのですが、比留間先生と池ヶ谷先生の訪問記は私が多忙のためなかなか訪問できず延々になってしまいました。今年の10月になって清水君が就職も決まって暇になったからとあって、比留間先生宅訪問記の原稿を纏めてくれたことより急に編集が終わり11月の初旬印刷屋に出しました。その後清水君が全面的に手伝って呉れましたので順調に出版にこぎつけました。

道を象徴しているように思えたのです。これは音楽全体にもいえる事かも知れませんが、私は演奏者と観客と一緒に写っているところが大変気に入ったわけです。演奏風景のみ入れることを主張した清水君には気の毒でしたが、写真については私の考えを入れさせて貰いました。これからのプレクトラム・アンサンブルが一般観客から遊離することなく、その中に溶け込んだものであるべきだと考えます。プレクトラム・ソサエティについてもそれが愛好者の中心的存在でありたいと考える次第です。これは自己流の考え方でここに記すべきでないかも知れません。

げることになった次第です。今後又のチャンスにもっとスマートにこのような出版をやってくれる人々が現れんことを願いながら筆を置きます。

最後にこの出版に際し皆様のご協力とご支援を感謝いたします。

幹 事 中村和夫

第15回定期演奏 昭和37年11月

「プレクトラム・アンサンブルの歩み」

編集開始 昭和37年4月

印 刷 昭和38年10月

発 行 昭和38年12月

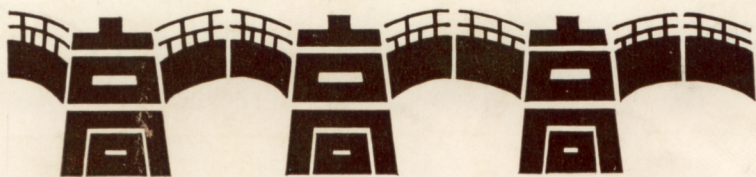
発行者岩高プレクトラム・ソサエティ

編集責任者 中村和夫

記念事業幹事 中村和夫

三浦秀子

田村 忠



岩高プレクトラム・ソサエティ